



リステラス星圏史略
古資料ファイル 4 - X



『皇女戦記』
(最初期設定資料)

(発掘整理作業中)

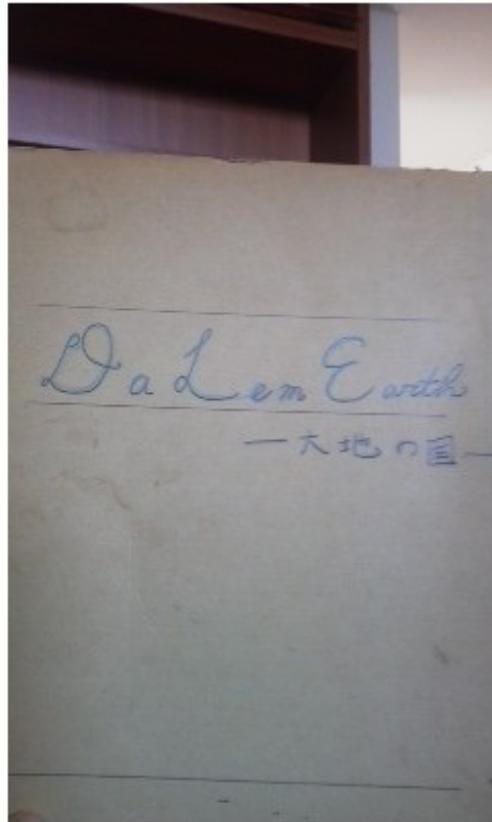
霧樹里守 is 土岐真扉

《大地世界》物語
～皇女戦記編～

(題字)

題字。

2016年1月29日 リステラス星圏史略 (創作)



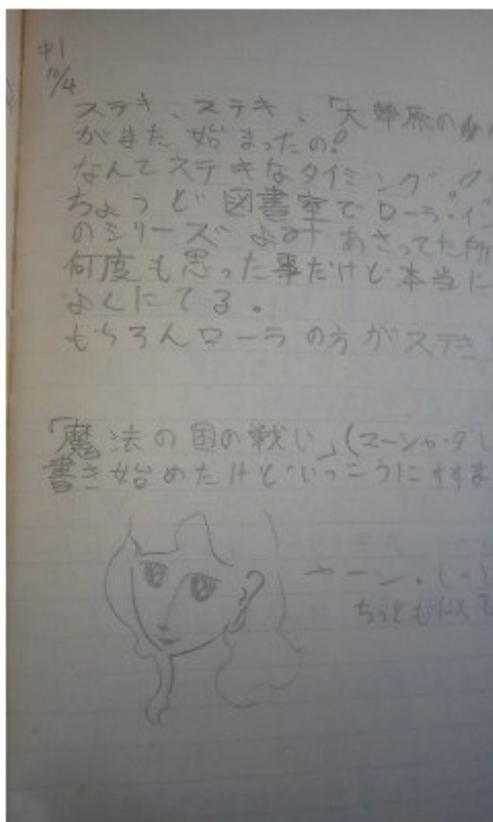
中1 (10/4)

中1 (10/4)

2016年7月13日 リステラス星圏史略 (創作)

「魔法の国の戦い」 (マーシャ・ダレムアス)

書き始めたけど izzこうにすすまない



大地世界物語（仮） （高校）

2016年3月11日 [リステラス星圏史略](#)（創作）

大地世界物語（仮）

by 遠野真谷人

子供心にも、このお話は確かに違うのだと判っていた。

(没設定)

(没 設 定)

2006年7月11日 連載 (2周目・大地世界物語)

ウェルロージー・マチルダ シーナ , 九尾の狐の精

まず、体育祭の朝 (疑問その1) に、転校生の鋭を案内していた真里砂と雄輝。
(真里砂はかつらをかぶっている)。(疑2)

三人は突如出てきた霧のうずにまきこまれて「落ち」る。

アリスの井戸ほらあなよろしく洞穴の中の家 (疑3) を横に落下して
ころがり出たのが《聖なる》感じのする岩清水のふち。
なにがおこったのかとあぜんとしていると、後ろの洞窟から
「その方ら何者じゃ」。

→ (「メイセマアリマ」は通路の守人 (もりびと) で、
自ら通路 (みち) をやってくる者のうち、
大地の国 (ダレムアス) に害する者を追い返す力を持っているが、
その力のない者に通路を開いてやることは許されていない) (疑4)。

その晩は眷属の用意してくれた寝所で眠る。
翌朝、「とにかく地球へ帰る方法を探さなくちゃ。
冒険にはその途中でいくらでも会えるよ……」てふことで、
まず三人を呼び寄せた者を探しだす事だと言われて出発する。

(※ 人間 (ティクト) をダレムアスに呼び寄せた時は、まず呼び寄せの魔法、それ
から、つなぎとめの魔法をかけておかないと、《壁》のうすいところからはじきかえ
されてしまう。それで三人にかけられた術をといてもらわねば帰れないわけ) (疑5)
。

途中、鋭が狐の精の言葉に疑問を感じて問いつめると、
マーシャはかつらを投げ捨てて、
「たぶん、わたしは地球人じゃないわ」

→

マーシャのダレムアスに関する知識は
ふっと唐突に表層に浮かんで来たり、
頭のいたくなるほど考えても無理だったり。
他人と話し合っていると思い出しやすい。
「ノストラダムスの予言みたいだね」

何日かしてようやく森のはずれに近づくと
豪雨に打たれてマーシャは高熱を出す。
そこを村人に見つかって「地球人（ティクト）だ」
大地地（ダレムアト）の乙女をどこからかどわかして来た……と、
しばりあげられてしまう。

翌朝マーシャが気づいた時に誤解はとけるが、
おかげでマーシャが地球育ちのダレムアトであることが確定する。

マーシャは自分の素状について知っている者がいないかと探してみるが、
わからない。
秘かに自分の記憶をとり帰そうと決意する。

なぞばかり山ほどかかえこんでこの村を出発する時、
村長のおいっ子が、はね人村の旅籠で、三月ほど前に、
丁度お前ほどの少女を探している若いやつがいた。
そいつがそういうのを聞いて旅籠の女主人が妙な反応をしたから、
もしかしたら何か知ってるかもしれない、行ってみな、と言う。

村でダレムアスの服をわけてもらい、
主にマーシャ以外は口をきかずに通して、
十日ほど、

- ・「またマーシャの童話狂いが始まった！」
「それを言うならきみだってSF気狂いじゃないか！」
- ・「……とにかく、方位磁石だけは無事だったわよ」
- ・三人は無類の議論好き。
- ・マーシャが養女だということは衆知の事だが
マーシャが気にしているので だれも口に出さない
- ・「きみが有澄家の前

ひみつ日記

……なんか、だんだん、
本格冒険ファンタジー？
っぽくなってまいりました……（笑）。

「旅籠（はたご）」なんて単語が出ている事からして、
『指輪物語』読了後であることは、間違いありません☆ (^◇^;)d

あんど、 マーシャのダレムアスに関する知識は
ふっと唐突に表層に浮かんで来たり、
頭のいたくなるほど考えても無理だったり。

…………… (^◇^;) げっ……………

これを書いたのは私が中1か中2の時のはずなのですが、
高校に入って読んだ本の中に、そっくり同じ症状の方が。

……………かの、豹頭王、その人であられますが……………☆
(^◇^;)

2006年7月11日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

- 真里砂は、森の中で緑の髪で走り回っていた時に、
高熱でおおれていた鋭を見つけ、有澄夫妻の別荘で看病して、
峠を越した段階で、持っていた紹介状のとうり、
両親 (注：有住夫妻のこと) に引き渡し、
自分は緑の髪を見られているので正体を明かさないと頼んで、
学園に戻る。
その後の面倒を見、朝日ヶ森に送り込んだのは有澄夫妻である。

~~里沙~~ → ~~ま~~ → ~~里沙~~

~~得謝夢理亜 (エルシャムリア)~~

現生真里砂

現火

流亜 真流羅辰

真砂

真荒砂

真新来砂

真愛亜流符 土里砂

[『《D》（に似た文字）略事典 4 』（@中3?） 2006年7月13日 連載（2周目・大地世界物語）](#)

エルフェリ	エルフ
エルフェリヌ	エルフの女性形。又はンに近い音
リレキス	鋭き者 > 鋭のマルカリディア
マダロ=シャサ	輝かしい雄々しさ > 雄輝のマルカリディア
ディア	> ダイア
ダイア	名前、 マルカリディアは地球における洗礼名のようなもの
サユライ	山ゆり（エルフェリナロク） マシカのエルフェリネィア
フェルラダル	銀のにれ
ルア・マルライン	第4王朝、 マーシャの父母が属していた美しい王都、
グラウド	長老

D-T (に似た創作文字) 略事典 3

2006年7月1日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

女神伝説 マリアンドリームの言動をしるした本、
聖書のような役割をはたしている。

~~マリーシャ~~ ~~マーイリーシャ~~

マーシャ マーライシャの愛称 (地球風だと マリサ)

~~マーイリシャール~~

マーシャル マーリシャルの愛称 (地球風だと マサル)

~~マーイリーシャ~~ ~~マーライシャ~~ マーイアルフ + リーシャ

~~マーイリシャール~~ ~~マーリシャル~~ マーイアルフ + リーシャル

リーシャ・リーシャル 娘・息子 (エルフ風の発音、
マリカル・ロックではライシャかレイシャル)

マーイアルフ マーイラ + エルフ、水面月の精 (月乙女の一人)

マーイア 水面 (主として森の池や湖の) に映った月、水面月

マドリアウイ 最古のダレムアト王都、また、その跡地

フェイリーシャ マーシャの母親の名 フェイラ + リーシャ
(マーイアルフは尊称で、
リーシャがかさならないようにした)

フェイラ 森の花

月乙女 レリナルディアイムの侍女たち (女神が地上にいるときのみ)。

月立の国 レリアン・ダレム、東の荒野の手前、果て山の西斜面にある。
月読峠に月の女神 (レリナルディアイム) の神殿があり、

エルフや神の末裔が多く住まっている。

レリアン 月立（つきたち）、月出（つきいで）、

ダレム 国、国土、土、大地、

レリナルディアム 月の女神、月と命運を共にするもの、
天空をつかさどる二大神の一人。

(鋭、マリサ、マシカ) (中2～高1頃?)

「ごうごうと白都は燃えていました。」 (たぶん中2?)

2016年2月18日 リステラス星圏史略 (創作)

清峰鋭くん生意気ざかり。

表情からすると9～11歳ごろ。



2006年7月13日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

◎ その昔、若く一本気だった__?__ (従女、ねえや、乳母、守人、.....?) 黒百合は、国の為の理不尽な婚姻のために西へ旅出した皇姫の一行からマーライシャをさらい、ひそかに地球へつれだして朝日ヶ森の奥で育てていた。

ある日 (旧暦の15夜にあたる、通路のひらく日)、ようやく探しあてて皇女をつれ戻しに来た二人の《大地の国人》 (ダレムアト) と言い争っているうちに、やはり皇女をねらってきたボルドガストムにおそわれ、黒百合は皇女をつれて一足先に逃れる。

本来ならば、皇女を一応安全圏に逃したあと、黒百合は二人を助けに引き返さねばならなかった。

- 《地の闇》 閉鎖し、岩盤に囲まれた暗の世界。
- 《地の闇に生きる者》 (ボルドム) (の国)。
《地の闇の殺す者どもの群れ》 (ボルドガストム)

が、このまま皇女をつれて行方をくらませば.....、またあの二人が死んでしまえば.....という強い考えにとりつかれて動けなくなっている一瞬に、ボルドムのしかけた火薬で、二人は黒百合が外から閉じてしまった、地下室にある脱け道の岩戸にすがりながら殺されてしまう。

それが原因で長寿人 (超寿人) となった黒百合は、罪の意識にさいなまれながらも、皇女を戦いに踏み込ませぬよう必死になる。

- 黒百合の行動には多分《樹》の影響が見られるのじゃないかな。
既に西方皇家に嫁ぐことに自分なりの覚悟を決めていたマーシャをつれだし、記憶を消して

ひみつ日記

.....え～ええええええええええっ.....?!

ナニコレっ!? 黒百合さんってば、こんな人だったっけっ.....?!

(^◇^;)げっ

2006年時点で（いや、それよりかなり以前から）、
記憶にあった話（キャラ設定）と、

全然違っちゃってる!! !(^◇^;)!

んですけどおおおおおっ!!

..... (^◇^;) ”..... (>_<)”(T_T)”.....

+++++

ちなみに、同じ大学ノートのきれっぱしの裏面には.....

「 3/29

地図が書けるようになるまでは、
ダレムアスには手をつけぬこと！ 」

.....と、書いてあります.....（笑）

◎ 設定表 ◎

題名 未定

枚数 600枚前後

分野 S・F、超能力者、

舞台 S・S・S、人工の独立した宇宙島

時代 宇宙平和歴(ママ)11～12

主要登場人物 主人公 サキ・ラン 地球人、♀、11歳

.....はい.....☆

別のシリーズ、ですね☆ (^◇^;)げっ

2006年7月13日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

- 「記憶を取り戻し、わたしの国、わたし本来の生き方の上に還る事ができないのなら、ここで殺された方がましよ。」
- 偶発事故でまきこまれながら、新しい危険な旅に出るとなったら、あわててついて行った雄輝と鋭。
- 大地 (ダレムアス) は完全な並行世界で、地球と交わる接平面上、太陽系内から月のへんまで、ずっと陸地。 (!?)

(地図)

北方 大
地
海 マルライン の
火の山 背 精 月読峠
西 方 皇 土 始祖平原 骨 の 月神殿
(マドリアウイ) 森
日出峠

縮尺メチャクチャ 大地の国 (ダレムアス) 地理図

.....しかし、大地の国 (ダレムアス) を書くのに、
海から書き始めるって、ものすごく、
海の球 (ティカース) 的な発想だと思わない?

ひみつ日記

地図です。

.....どうやら、これが「最初に書いた地図」らしいです.....？

(ちなみに、地図上の右上(ナナメ上)方向が、北。)

(かなり大幅な設定追加／変更メモ) 続き (@中二～中三の春休み?)

[『 \(かなり大幅な設定追加／変更メモ\) 』 \(@中二～中三の春休み?\) 続き](#)

2006年7月13日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

○ 地球で言えば、12歳ぐらいで、皇女のおつきで西方（モルナス）行に加った黒百合は、皇女に対する同情から後先考えずに皇女をつれて逃げだした。

途中、見つかって追いかけて来た兵二人を夢が夢中で殺し、村の魔法使いを脅して、通路を開くという分不相応なまねをさせて殺し、ために黒百合の本名は大地の国（ダレムアス）では忌むべきものとされて埋められている。

地球に着いたマーシャは、大地の国（ダレムアス）へ帰ろうとして黒百合のそばから逃げだし、ダレムアスへ帰る方法を捜しながら放浪しているうちに、かえってボルドム軍の手先に見つかり、不意にとびだしてきた長寿人に救われたものの、記憶を失って有澄宅へ。

影のように追って来た黒百合は、マーシャが幸福であるのを見て朝日ヶ森に潜伏しているが、彼女には知れない所で、彼女を追ってきた長寿人たちが学苑にはいりこみ、マーシャの記憶の鍵を握りながら、時が来たらそれを教えると言って、マーシャに帝王学をしこむ。

長寿人たちが自分をつかまえようとしているのを知った黒百合は一時期姿を消すが、《呪縄》につかまっているので、再び帰ってきて、帰ろうとするマーシャを捕まえて無理矢理心中しようとする。

後、マーシャを追って名を変え、姿をかえてダレムアスに戻った黒百合は、影のようにつきしたがいながら、追手を避け、マーシャを護り、良心と呪縄の板バサミになりながら、遂にマーシャが記憶をとり戻した日に捕えられ、再び少女の姿でマーシャの前にひきだされる。

「さあ、おまえにどんな悲しみがあろうと、おまえは掟を破った。おまえの為した事のために一つの国、一つの世界の営みが変わってしまったのだ。皇女の御名において、今、裁きを受けるがいい！」

「争魔の力から身を避ける術（すべ）は知っているだろうに、争魔と戦うべき身でありながら、そのさそいに甘んじるとは何ごとか！」

ひみつ日記

※ために黒百合の本名は大地の国（ダレムアス）では忌むべきものとされて埋められている。

はい……。私の記憶の中でも、埋められちゃってました……。 (涙)

※ 不意にとびだしてきた長寿人に救われたものの、

こっちが「戦士・黒百合」さんかと思ってた (記憶してた) のに……。 (^◇^;)

※ マーシャを捕まえて無理矢理心中しようとする。

……。これじゃこの人、まるっきりストーカーじゃないですか……。!!

……。あれ? 「黒」「ユリ」……って……、
そういう意味が、あったのか……………?????

(^◇^;)げっ

『(粗筋メモ)』 (@中2? < 『指輪~』のアニメ版を劇場で見た[後]なのは确实☆)

『(粗筋メモ)』 (@中2? < 『指輪~』のアニメ版を劇場で見た[後]なのは确实☆)

2006年7月12日 連載 (2周目・大地世界物語)

まず、鋭が来る。

それから緑衣隊。

なにが起こったのか?!

院長が《地下》、裏や緑衣隊-長寿人、不思議の旅人、

その間にはさまってる魔法、神話、伝説、超能力、侵略者。

それらの間になにかつながりが.....?! と、

思ったら、《落ち》た。

冗談じゃない、糸口を見失ってしまう。と「ふれば土砂降り」

帰ろうとするうちに事件に直面。

とまどい迷う鋭とマーシャをしり目に

単純な雄輝がまっさきに飛び出し

そうこうするうちにマーシャのなぞ。

ダレムアスの現状などが次々にわかってゆく。

やがてマーシャが疑問を抱きはじめて、

帰れるとわかってもうちあけることができない。

話を聞いた時、鋭も雄輝も動じなかった。

「義を見てせざるは勇なきなり。」「乗りかかった船さ」

「地球(むこう)にほのことはきっとなんとかなるよ。

それより今、おれたちができること、しなけりゃんらんことをやろう。

見捨てるわけにはいかないじゃないか。」

そうこうするうちにマーシャ、鋭の気持ちがふくらみ、

マルラインから更に旅へ、キャラバンとの出会い—

ついに(.....)と出会って、マーシャの記憶が戻された。

しばらく続く異常な態度。

長い旅の始まり。

学園
学院
学苑

現皇太子即位 70歳

皇太子 45歳

その子ら 20歳前後

長子 性格温厚、皇太子似

次子 比較対称、陰性の情熱

末女 典型的お嬢ちゃん風、一見無邪気（皇族結婚）

- 鋭が転校してくる。有澄夫妻の紹介。
- 翌日（or二～三日して）緑衣隊が来る。
「鋭、何か心当たりがありそう知ってそうね？」
- ディスカッションのあげく様子をのぞきに行く。
カイ、レムなど、東京へ。
- 院長とのわけのわからない対話を聞く。
- ディスカッション、ディスカッション、推理。
鋭の皮肉な態度、マーシャ笑う。
- 「だから私は魔法が使えるんだってば」マーシャの緑の髪。
「みんなには、内緒よ」
- 「君はエスパーだ」いや宇宙人かも知れないといってひっぱたかれる。
- 「このごろ律子たち何やってるのかしら。」レムたち何やってるのかしら。
律子は何か知ってるみたいだけど。」

『大地の国（ダレムアス）シリーズ 第一巻 設定資料 』（@中2後半？）

2006年7月10日 連載（2周目・大地世界物語）

原稿量予定を 大体 500～600 に見つもって

◎モチーフ（年代順）

- マーシャが別荘に来る（1991年10月10日、6歳）。
- マーシャの成長課程、有澄夫妻の養女になる。妖精
- 朝日ヶ森へ編入、雄輝と会う。（1994年）。
- 朝日ヶ森の生活、時折かいま見る【裏側】と、不思議の仲間たち。
- 1995年、雄輝の両親亡くなる。
有澄夫妻が彼の後見人になる。会社を売って朝日ヶ森に投資。
- （グループの形成）律子、他。
- （鋭が【政府】に目をつけられ、逃げ出す）。

- 鋭が転校してくる。律子と小山正（まさし）君。仲間に入る。
男尊女卑で一もんちゃくある。（1996年、2月）。
- 夏の休暇
- 体育祭、有澄夫妻を迎えに行く。霧。
- 森の中で気がつく。

◎鋭は体育祭の朝に転校してくる、こと。

○体育祭の朝

- マーシャが校長室に呼ばれる
- 転校生
- 歩いていく間の会話……「うるさいな、これだから女ってのは……」
- 雄輝が合流する。
「あら、知っていたの」
「……で、シベリア流刑のうきめにあって」
真里砂と雄輝しゃべりっぱなし、
鋭も少々うちとけてくるけれど、有澄夫妻を見て黙。
- 寄宿舍から校庭へ。

●霧 突然、霧がでてくる。あっというまにとりかこまれて、
うずまいた霧が地面に穴をあけたようになって、
マーシャが吸い込まれる。雄輝・鋭がとっさにおいかける。
そしてきりがのこらず見えなくなった時、
そこにはだれの姿もありませんでした。

ひみつ日記

漫画家は無理だ、作家（小説家）になる!!
と、本格的に決意したようですね.....（笑）

『指輪物語』のアニメ版を劇場で見た後、です。

ちなみに、これが私が初めて映画館で見た映画♪ !(^^)!

追伸ですが.....。

●1995年、雄輝の両親亡くなる。

これ、「ジャンボジェット機の墜落事故で」なんですが.....。
飛行機が落ちる事故は、これより前に起こってしまってますね★
1995年に起きたのは、大震災と、サリン事件。

私の「役に立たない予知夢シリーズ」、
いつもビミョーなところで、現実とは、ズレます☆ (^◇^;)げっ

(創作メモ) (中三、とノートの表紙に書いてある☆)

『 (創作メモ) 』 (中三、とノートの表紙に書いてある☆)

2006年7月10日 連載 (2周目・大地世界物語)

マーシャは、始め(20年、地球風に言えば5才ぐらいから)朝日ヶ森の中の山小屋に二人のダレムアトといっしょに住んでいた。(5年くらい、6才まで)。しかし、ボルドムントに発見され、二人のダレムアトは王女を逃がして相討ちになってしまった。

マーシャは嵐の中を一中夜さまよって、有澄家の別荘にたどりついた。

ひみつ日記

※ 「一中夜」 原文ママ (笑)。

『 (設定メモ☆) 』 (てゆーか、中学の進路指導のプリント類の裏に書いてる☆)

『 (設定メモ☆) 』 (てゆーか、中学の進路指導のプリント類の裏に書いてる☆)

2006年7月24日 連載 (2周目・大地世界物語)

鋭は骨折 (脱走の際の) によって両腕使えるようになってる。

◎主線。

○ いじっぱりで自尊心の強い鋭がいかにしてマーシャの従者に
変貌したか。

○ 雄輝は欧州滞在中、朝日ヶ森の教生である家教と
総本山からのテキストで教育を受けた。

● そうして振りかえれば
既に地の橋など
見えはしないのでした。
(東の地・中心地・大地世界領域 (守護域) の簡略な模式図あり)

● 一旦地球世界から外に出て、入り口を求めてもどってくる？
途中で "力" を求めて、遠隔の地へ行く？

● 大地世界の形状!!

第一部 『記憶を探して』（仮題）（中学在学中？）

『（あれ？ これは中学在学中かな.....??）』

2006年7月16日 連載（2周目・大地世界物語）

大地の国戦記 皇女編 I

第一部 『記憶を探して』（仮題）

『指輪』を手本にして書くこと。

ダレムアスで記憶をとりもどした時、マーシャは、再びアルマリオンによって、地球での記憶を大半隠されてしまう。

おまえたちは地球に帰れというアルマリオンに、雄輝と鋭はくっつきかかり、皇女然となって一人でさっさと出かけたマーシャの後を追う。

アルマリオンは彼女の強い魔力にもかかわらずマーシャが既視感覚に捕われ始めた時に、さびしく微笑しながら呪文をとく。

♪ わたくしの時は停まっております
母が涙を流したゆえに
わたくしの時は停まっております
異母兄（あに）がわたしを愛したゆえに ♪

(※後に《狂女レフイヤ》と呼ばれる？少女のイラスト※)

『 人 名 一 覧 』 （高校1年）

『 人 名 一 覧 』 （この元気の良い文字は、高校1年ピカピカの新入生？に違いない☆）

2006年7月14日 [連載（2周目・大地世界物語）](#)

◎ マーシャ

地球名： 有澄真里砂

正式名： 水面月（フェイリーシャ）の娘・危機皇の世継、
マルラインの炎の皇女マーライシャ・ダレムアス。
（マーライシャ・マルライン・ダレムアス）

仙 名： マーイアルフェリーシャ

生誕名： マリスシア・ラ・ルル・セイラリマ
（マリス、マリサ）

◎ 女皇（めのきみ）・仙女皇セイラ

通 称： エルフェリヌ・マーイアルフ
（仙女 緑乙女 森の緑花）

職 名： 水面月フェイリーシャ

仙 名： セイウイラノリウイラウアマ
（我らを悲しませた娘）

◎ 鋭

正式名： 清峰 鋭

大地名： リレキス・ジュン（鋭く・おだやかなる者）

変 名： ジュン・シャーピエス

◎ 雄輝

正式名： 翼 雄輝

大地名： マダロ・シャサ（勇ましき少年）

◎ 西の三皇子

クアロス・モルナス＝レデ・ダレムアス

ネイマス・モルナス＝レデ・ダレムアス

マデイル・モルナス＝レデ・ダレムアス

◎ マーシャル

正式名： 皇の息子・水面月の血統・
マリシアル・マルライン・ダレムアス

変 名： ヤスカ

重複してんなあ。水面月の娘マーライシャ

2006年7月15日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

- アンジェリク風大河口マンにしたてあげる気だったら、
地球の6年間は「夢のような……休暇のような」
描写として出る事になる。

- 山ゆり (サユライ)
黒ゆり (ジェルユライ)

- 「どうして?! 母さま、どうして
お兄さまに会ってはいけないの?!
わたしはお兄さま好きよ。
兄さまが大好き。」

わたしは前宇宙の女王、最後の生き残りにして時の旅人。
《黒百合》と呼ばれる女戦士、アルマリオンである。

わたしは他の不思議の旅人、時の追人 (おいひと) 等と
連れいしてかの《樹》、喰魔邪夢魔邪樹を滅ぼさんがため
に長の年月を追い続けているものであるが、

~~喰魔邪夢樹~~

~~喰邪夢魔樹~~

~~魔邪夢樹~~

~~邪魔夢樹~~

~~喰夢魔邪樹~~

~~喰魔邪夢樹~~

(ルア・マルライン粗地図)

(ダレムアス古?地図)

北 海

太 湖

ルア・マルライン

火の山

大地の背骨山脈

旧西都 旧都

モルナス・デア

涙海

塩湖

←じゅう

月 鏡

月 読 の

女 峠 湖

神 (ウミ)

殿

涙亞 真流良院

真鳥愛初

真愛礼謝

真里思亞流

真鹿 笛流良達 笛良達

ひみつ日記

ちなみに、高校時代の学校発行のプリントは、

再生紙ではなくて「わらばんし」です.....☆

そしてワープロではなくて「手書きのガリ版刷り」です☆

○ The 8th Sakuragaoka High School Brass Band Regular Concert ☆アンケート☆

○ 309組 39番 (本名) <英語の小テスト。

全問正解♪ !(^^)!

○ 署名運動についてのお願い ...PTA会員各位殿...

2006年7月15日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

マーシャ4年生、つまり「4年後」の10歳当時に、黒百合たちの不意の出現と消失で謎を感じ、雄輝と二人で世界中に散らばっている答えを追って歩く。

わりとアンソロジー的な構成にしたい。『記憶の旅・第一部』

季節はずれの転校生を巻きぞえに、「かつて盛えた四国界のうち、今現在残っているのは、地球、ボルドム、ダレムアスの三つ。うちダレムアスがマーシャの故郷で、どうもここがそうらしい……」程度の知識で始まる、『記憶の旅・第二部』

自分の身分素性を思い出す代わりに、地球に居た頃の事を一切忘れてしまった皇女を追いかけて、雄輝と鋭の旅が続く……『記憶の旅・第三部』

ある晩、ふとした事から救けた《仙》族（エルフエリ）の戦士に、宝玉《ルマルウンのかけら》を託された、少女マシカ。二年後、妹宮を求めて流れついた皇子マリシアルとの短かい恋のあと、鬼王にさらわれ、助けに来た彼の命を護る為に宝玉を使う。更に二年後、村は滅され、マシカは皇女に全てを打ち明けた後に、《仙》の戦士を探して旅に出る……『宝玉物語・I』

次の世継ぎは自分だと知り、同時に兄宮の死は自分の責任だと思い悩んで髪を切ったマーシャ皇女。と同時に帰郷の方法を知りながら二人に話す事ができず、期限切れになってようやく打ちあけたものの、逆に雄輝から永住の決意を聞かされる。ひとまず従姉姫の館に身を寄せたものの、戦火の中で雄輝とはぐれ……『女皇子（めのおうじみこ）・I』

(なぜか同じ用紙内に鋭くんが描いてある...) (1983年)

「ミアルド様、ご存知ないのですか？」 (1983年)

2016年6月15日 リステラス星圏史略 (創作)



(なぜか同じ用紙内に鋭くんが描いてある...)

「初代王マルドリスタン」！ 2015年12月18日

「初代王マルドリスタン」！

2015年12月18日 リステラス星圏史略 (創作)

...あ～... (^ ^ ;) ...☆

やっと発掘できた。完ッ全に！忘れきってた、この名前...

...w (^ ^ ;) w...

<http://76519.diarynote.jp/200607170218170000/>

初代王マルドリスタン

つまり、「女神マリアンの夫となった人間」ですが....。

...とにかく登場人物が多すぎて、作者みずから、ぜったい覚えきれない...★

...< (一一 ;) >...

...うわあ...★w (^◇^ ;) w...★

<http://76519.diarynote.jp/200607180115090000/>

女神の娘である同名の神女マーライシャ

「没設定」決定！ (^へ^ ;) ！

「マリスシア」せいういら・のりういらわま！

<http://76519.diarynote.jp/?day=20060731>

つけ加えるならマルクワス（王族、つまりダレムアスにおける創世主、女神マリアンディアの子孫）の直系であるマーシャなどは、前例からして400年前後はかるく生き

るのではないのでしょうか？

...どおりで見つからないわけだ... (一一；) ...こんなところに書いてあったか...！

孫のほうの律子嬢はよく眠れたようです。"リツコ"という音はダレムアスの言語体系にはなじみにくいもので、早速に愛称がつきました。"リーツ"。平野にいる小動物です。このあたりでは見られないようなので絵に描いて説明したところ、本人も気に入ってくれた様で、ふだん、口語で呼ぶときにはこれに接頭的美辞がついて"マリーツ"になります。

...って... (@@；) ...え...

り、「りす」...??！ (^◇^；)！

「律子」って、「りす」だったのか...ッ！！

(...納得...) (一一；) ...

(没原稿)

(没原稿)

有澄真里砂様

久しく会っていないけれど、
あなたの事だから、たぶん元気で
いるのでしょうね。
こちらはろくに雪もふらず、
ごく平凡な毎日です……………
……………あなたは、なんで私が
こんなにしらじらしい書き方を
するのか首をひねっている事でしょう。
実を言うと、今は国語の授業中で
一度先生に提出しなければなら
ないのです。

したがって秘密の話もできないし、
ましてこの間ついたリーナからの手紙
を同封する事もできないのです。

（中継役はつらいなあ） ……

……………あら、いやだ！
はげしく話が飛んじゃっ
たわね……………

前文終了、次へ

(改頁)

さて、いよいよ先生の言う所の
本文に入ったわけですが.....

あなた.....やめた！ およそ
しらじらしい敬語なんてもうつかわ
ないわ。

マーシャたちがそちらへ行ってから
1年以上.....2年近くかな.....

たちます。

あのとき私もいっしょに行けばよかった。
そうすれば ずっとあなたたちと一諸に
いられたのに。

こちらの生活は単調で退屈で
ほとんど変化がありません。
安全すぎるのです。

「それがこちらのいい所さ」
と言ってしまえばそれっきりだけど.....

本当にマーシャが
うらやましい。

(改頁)

さて、いよいよ「重大な用件」
に入るわけですが.....

別にないなあ。

だって先生が目を通すものに
本当の用件を書けるわけがない

でしょう？（リーナからの手紙は
定期便の方で送るわね）.....

あ！あったあった！

最近また本の中の気に入った詩
やセリフを集め出したの。

少し書き送るから、鋭や雄輝たち
に聞かせてあげて。

地球を発つ恋人へ

そんなに遠くへ行けば

あなたは私の事を忘れるわ

そんなに長い時間がたてば

あなたは私の事を忘れるわ

だから行かないでここにいて

だから行かないでここにいて

萩尾望都「少年よ」より

ハンプティ・ダンプティ

死んでしまった白ねずみ

くだけたガラス

たべちゃったお菓子

すべてもとにはもどらない

萩尾望都

船よ帆かけて進め

空の下

星の下

東へ 黎明へ

私の心は

はるか …… あの果てを行く

萩尾望都

妖精人の国は

どこにあるのかしら

そこでも星は同じかしら

花郁悠紀子

バラの小道たどって

白いドレス着て

あなたに会いに来たの

早く来てキスして

パパにもないしょよ
ママにもないしょよ
牧師様にもないしょよ
早く来てキスして

萩尾望都

また今度 いいのがあったら書くわね。
鋭や雄輝たちによろしく。

かしこ

1月27日

有澄真里砂 様

P・S サキからの手紙も送ります。

ひみつ日記

.....とか言って、もう一個、ダレムアス系?のが出て来た.....w

このころから、友だち（手紙を書く相手）
いなかったんだね～☆ わたし.....

ちょっとフガイナイかも?! (^◇^;)” """"

1. 霧

「う……ん。なあに、ママ。もう朝なの？……」

真里砂はふとんの中に頭を沈めながら不機嫌そうに答えました。

せっかくすてきな夢の途中だったのに……。

「なに、寝ぼけてんだよ。さっさと起きろっ！」

ばっ！と非情にもふとんを引きはがした声にぎょっとなって飛び起きると……そこにあきれ顔で立っている雄輝がいました。

「寒いじゃない雄輝。なにするのよっ！」

寒いと言うよりこの声には、12歳にもなろうという少女をつかまえて平然とふとんをはがすような、失礼なマネに対する抗議が含まれていたのです。

が、雄輝にとって真里砂は、幼なじみのかわいい妹にすぎませんでした。

「おい、しっかりしてくれよ。今日がなんの日だか忘れてるのか？」

「あ！」

もちろん今日はこの朝日ヶ森学園の体育祭の日です。

そして……全寮制のこの学園では、夜の9時から朝の7時までの10時間、男子が女子の寄宿舍に入ることは禁止されていました。

その雄輝がすでにここにいるということは――。

「いやだわ。もう7時過ぎちゃったの!？」

開会式は8時から。真里砂はいろいろな選手や役員を掛け持ちしているから、その前にやるいろいろなあります。

顔ごと水につっこみ、こすりもせずにさっとタオルでなで、火花が出るほどのスピードで髪にブラシをあてて、あとは体操着に着替えさえすれば朝の仕度は終るわけです。

真里砂はまだ部屋の中にいる雄輝を容謝なく追いたてました。

「いつまでも子供扱いしないでちょうだい。」

追い出された雄輝にしてみれば、つい最近まで服のボタンをかけてやっていた真里砂がです。

彼にはなぜ真里砂が怒っているのか、そのところがさっぱりわかりませんでした。

とはいえ彼だって体育祭実行委員の一人です。

真里砂を待ってなどいたら、まず朝食抜きは覚悟しなければならない

でしょう。

雄輝が先に行ってしまったことを知って真里砂は少なからずがっかりしました。

——ひどいわ。待っていてくれても良さそうなものなのに。

けれどそんなことでいつまでもぐずぐずしているわけにはいきません。

彼女はさっときびすを返すと雄輝とは逆に体育祭会場の大グラウンドへ向って走って行きました

。

20分後、真里砂は駐車場に向って走っていました。

委員会の最終打ち合わせには朝食抜きでなんとか間に合ったのですが、それが予想以上に長びいてしまって、約束の時間はもう過ぎています。

と、横合いから鋭がかけだしてきました。

「おーい、真里砂！」

「なに、鋭。今急いでいるのよ。」

「わかっているよ。おばさんたちを迎えに行くんだろ？ ぼくもつきあおうと思ってさ。それと……」

そう言いながらもどンドン走って、ちょうどその時校門の向うにいる雄輝が手を振りました。

「急げ！ ちょうど車が止ったとこだ！」

真里砂と鋭は雄輝に追いつき、校門の所から一斉に叫びました。

「パパ、ママ！」

「おばさ〜ん！」

どうやら、走りだそうとする夫人を有澄氏が捕まえている様子です。

なにしろ、真里砂を育てたママときたら、何もない所でけつまづくという特技の持ち主なのでから。

「おいおい里子、せっかくのドレスを大無しにする気かい。まあ、ぼくのプレゼントよりも、君のかわいい子供たちの方が大事なのはわかるがね」

「そんなこと……。でも、わかってくれるでしょう、隼人？ 一人も子供を持ってないはずだったわたしにとって、あの三人がどんなにすばらしい宝物か……。」

二人は目を見合わせて微笑みました。

今でこそ申し分ない幸福な家庭を築いてはいますが、これまでずいぶん辛い目にもあってきたのです。

P3.

……今でも思い出すのは六年前のこと。

その年、二人が長い間待ち望んでいた赤ちゃんを流産して、もう二度と子供のできない体となった里子夫人は、自分の体の生まれつきの病弱から真紀子（死んだ赤ちゃんの名前です）を死なせてしまったと、ノイローゼになり、この朝日ヶ森の奥深くにある別荘に、隼人氏と二人、半年間

の転地療養を続けていました。

そんなある日、ちょうど6年前の今日、10月10日の夜中に一人の少女がやって来ました。

少女は日本人ではないらしく、緑がかった不思議な髪の色をして、折からの嵐に打たれた高熱がひいた時には、ただ名前をマーリシャと言うばかりで、一切の記憶を失っていました。

有澄夫妻はその少女を養女としてひきとり、実の子以上に大事にしました。

それが6歳の真里砂でした。

それから三年して、雄輝の両親、隼人氏の親友の翼夫妻が飛行機事故で亡くなり、それ以前から真里砂と仲の良かった雄輝も、休暇ごとに有澄の家で暮らすようになりました。

そして、鋭です。彼は一年前の臨時編入試験でみごとな成績を示して、特別奨学生として編入してきました。

元来、朝日ヶ森学園の奨学制度に全額支給という例はなかったし、鋭は孤児院育ちの捨て子の上に国からの援助を一切うけつけようとしなかったので（これにはとても深いわけがあるのですが、それについては長くなるので、別の章で詳しく説明することにします）必要な学用品や服、食費などは、全て里子夫人から出ていました。

もっとも、鋭はこれを『無期限無利子の借入金』と呼んで、卒業後には全額返すつもりなのですが.....。

そんなわけで、一人の子供もないままに寂しい生活を送るはずだった二人に、今は大騒ぎで迎えてくれる三人の娘と息子たちがいるのです。

里子夫人が人目も気にせず走りだしたくなるのは当然のことでした。

「ねえ！」と、真里砂が言いました。

「少し、視界がぼやけてきたと思わない？」

「本当だ。.....霧かな」

それは霧にしては少し妙でした。

P4.

いつの間にか現れたと思えばみるみるうちに濃さを増し、真里砂たちが気づいたころには、既に10数m先の有澄夫妻がはっきりとは見えなくなっていました。

「おかしいわ。何か変よ。この霧には何かの“力”が働いているわ」

「うん。力場（フォース・フィールド）ってやつに包まれたらこんな感じかな？」と、鋭。

「ちがうよ」

雄輝がじれったそうに言いました。

「おれたちが言いたいのは、つまり、『魔法的な』って意味なんだ」

（おれたちだって、と鋭は少しむっとなりました。どうせぼくはきみらと違っておとぎ話なんか信じてないさ。）

彼らは気がつきませんでしたでしたが確かにそれの動きかたは魔法でもなければ説明のつかないような

ものでした。

それでも三人はこれを霧だと思っていましたから、真里砂はわけもなくうれしいような悲しいような不安な気持ちで、雄輝はワクワクしながら、鋭は（意地でも）この霧を科学的に分析してやろうと、次にはなにがおこるかと思いながらじっとしていたのですが……。

里子夫人はそれの動き方に気づいてからもしばらくの間、何も言いませんでした。

霧が、まるでこぼれた水の逆まわしフィルムでも見ているように、真里砂たち三人のまわりに集まって行くなどということが、どうして信じられましょう？

けれどそれは本当におこったのです。

それははどんどんどんどん小さく濃くなって行って、そのうちには三人を中に閉じこめて銀白色のぼうっとした球になってしまいました。

そのころには多勢の人々が集まって、青ざめたり、叫んだり、子供を助けろとどなってみたり、大騒ぎをしていましたが、実際にはだれもどうしたらよいかわかりませんでした。

ただ一人、真里砂の親友の律子が、助けられないまでもせめて一諸にこの災難（かどうかはまだわかりませんが）な目に会おうと、それの中に飛びこもうとしたのですが、里子夫人の涙が彼女の足をひきとめました。

里子夫人は今にも死にそうな青い顔をしてじっと立っていました。

が、もうすっかりあきらめの表情で、律子を振り向いて言いました。

「もう会えないわ。もうあの子には二度と会えない。」

1P=800字分

P5.

彼女がそう言った瞬間、まるでそれを是認するかのよう、それがふっ、と見えなくなりました。

どんどんちぢまって見えなくらいになってしまったのだとか、いやそうじゃない消えたのだとか、後から人はいろいろなことを言いましたが、ただひとつだけ確かなのは、中の三人も一諸にいなくなったということです。

この地球上から。永遠に。

その後何ヶ月にわたる搜索も、それのおこった地点の科学的な調査からも、三人の行方を知ることではできませんでした。

「あの子は故郷へ帰ったのよ。」

そう里子夫人は言いました。あの子……真里砂。

「あの子はある日不意にあらわれて、わたしに楽しい魔法を見せてくれた。魔法は魔法。砂時計の砂が全部流れ落ちたら、柱時計が十二時を打ったら、その時楽しい夢は覚めるの。いつかこうなるだろう事はあの子が来た時からわかってたわ。……覚悟はしていたはずなのに——。」

隼人氏は何も言わず、二人はひっそりと帰って行きました。

けれど律子はそうは思いたくありませんでした。

あの三人が二度と戻ってこないというのは本当かもしれない。

それから、真里砂の故郷へ行ったのだということも。

でも。と律子は思いました。

いつかきっと、もう一度あの人たちに会ってみせるわ。あの三人が帰ってこないというなら、わたしがそこに行くまでだわ。

彼女はまた、この裏に隠された大きな動きを知らませんでした——。

(☆窓辺にたたずんで彼方を見上げる「大江律子10歳」のシャーペン描きイラストあり。)



※「カ場（フォース・フィールド）ってやつ」…… (^◇^;) ……『スターウォーズ』の「フォース」じゃないです！ 懐かしのSF古典・『スカイラーク』シリーズ（ハヤカワSF文庫～♪）のほうの影響です☆

『 仮題 炎の皇女（ひめみこ）物語 』 （@中学1年か2年。）

[『 仮題 炎の皇女（ひめみこ）物語 』 （@中学1年か2年。）](#)

2007年7月9日 [連載（2周目・大地世界物語）](#)

仮題 炎の皇女（ひめみこ）物語

（地球の姉の国戦記）

（地に立つ——大地の国物語）

第一部 記憶を求めて

第一章 ダレムアス

第二章

『1. 霧の中に見たもの 』 (中1かな?)

『1. 霧の中に見たもの 』 (中1かな?)

2006年7月10日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

朝、彼女は目を覚ましました。

「さあ。今日は体育祭よ、真里砂。」

時計は予定より5分遅れた事を教えていたけれど、なんの、そのくらいかまうものではありません。

体調は上々、睡眠も十分。

明け方にみた妙な夢が心の端にひっかかるけれど、それは後でひまな時に考えることにしましょう。

「これなら上位にくいこむのだって夢じゃないわ」

俗にシベリア流刑地と呼ばれている学校の最外周マラソンコースは

1. ここはどこか

「いったい、ここはどこなんだ？」

三人はみじめで、寒く、そして怖えていました。

森の中の空き地は暗く、北の方から来る風が少しづつ三人の体を冷してゆきます。

三人は昼間汗で濡らしてしまった薄い体操着を一枚着ているだけでマッチも、ライターも、火をおこす道具を何も持っていないのです。

——木の葉や枯れ木は山ほどありましたが……。

「12時10分」と、雄輝が言いました。

「時計は狂ってない」

それなのに、たった今、夕陽が沈もうとしているのです。

「これで日本じゃないってことは確かだな、鋭。」

「昼の12時か夜の12時かわかればなァ。いったいぼくら、どのぐらいの間、気を失ってたんだろ。」

鋭は隣で火をおこしている真里砂に話しかけたのですが、真里砂は相変らず何か思いつめた顔をして、答えません。

しばらく会話が宙に浮いた恰好になりました。

彼ら三人は、ほんの数時間前までは、日本のある国立公園に境を接する広大な森林「朝日ヶ森」のはずれの学園で、真里砂と鋭にとっては小学校最後の、雄輝にとっては中学最初の体育祭に参加していたのです。

それが、いきなり現れた銀色の濃霧の中で、真里砂の体が何もない空間に吸い込まれたように見えなくなりました。

近くにいた雄輝と鋭がとっさに「その空間」に飛び込むと、一瞬森の中の焼けくずれた山小屋が見え、次いで更に「強い力」で「引っぱられる」のを感じて気を失いました。

そして気がついた時には、三人が三人ともこの不思議な森の中に倒れていたのです。

「おれは最初、朝日ヶ森の中だと思ったんだ。木の様子が大体同じだろ。もっとも向うはまだ10月はじめなのに、こkは11月の終りって感じだけどな。……緯度か高度が高いのかな？」

「とにかく南半球じゃないみたいだ。温帯と亜熱帯の間くらい

で、日本と気候の似てる……あれ？ 日本から東か西に90度行った所ってどこの国だっけ」

「なんだ、理科には強すぎるぐらい詳しくせに地理はからっきしだめなんだな。東は……で、西は、えーと。」

二人はしばらくの間、あそこでもない、ここでもないと議論していましたが、いくつか条件のあてはまりそうな土地があったにもかかわらず、「かもしれない」以上に話はすすみませんでした。

大体、どうしてこんな事になったのか、ここにふっとばされてきた理由が解らない。話題はいつの間にかそちらの方に移りました。

「なんて言うか、こう、……気絶する前にさ、引っぱられるというか、だれかに呼ばれたような気がしたろ。まるで魔法で吸い寄せられたって感じで。」

雄輝がこう言うのを聞いて、鋭はおなかをかかえて笑いだしました。

「魔法だってえ〜!? この場におよんでそんな非科学的なことを言いださないでよ。」

「悪いかァ！ おれはだれが何と言おうと魔法を信じてるぞ。おれは昔、魔法が使われる所を見たことがあるんだからな！」

「見たことがあるって？ 夢想家もここまできると狂信的だ。ホントに中学生ですか？ 翼先 輩。仮に魔法だとしたら、だれが、何のためにぼくらを呼んだりしたのか知りたいや。」

鋭の皮肉に、しかし雄輝は真面目に答えました。

「マーシャさ。マーシャを呼んだんだ。」

「え?!」

「いつも言ってるだろう。魔法を見た事があるて。あれはマーシャなんだ。いままでだれにも言わなかったけど、マーシャは小さい頃魔法を使えたんだ。……おれたちは単にそれにくっついてきただけなんだ。」

マーシャというのは、もちろん真里砂の愛称です。

雄輝があまりに真剣な顔をして言ったので、一瞬、鋭はひどく驚いた顔をしていましたが、すぐに前にも増してひどく笑い始めました。

「すごいジョークだ！ おーいマーシャ。雄輝が、君が魔法使いだなんて言いだしたよ。ぼくら魔法で呼び出されたんだって。」

真里砂はこの間ずっと木と木をこすり続けていたのですが、丁度この時、小さな枯れ葉の山にちらりと赤い花が咲きました。

P3.

いじの悪い風に吹き消されないよう片手でかばいながら、真里砂はまるで毎日やりなれてますといった顔をして、次々と枯れ葉や小枝を積み上げていきます。

ふいに、真里砂は低い声で歌いだしました。

その歌は日本語でも英語、フランス語やドイツ語でも、真里砂が知っていそうなどの言葉とも違っていたので、鋭と雄輝は始め真里砂がでたらめを歌っているのだと思いました。

けれど、きちんと韻を踏んで調子の良い旋律が繰り返しかかるころには、これが二人の全然知らない言葉で歌われているのだということがわかりました。

それでも雄輝には何かその言葉に思い当る事があるらしく、驚きながらも目を輝やかせて聞いているのですが、鋭にはそれがかえって気にさわりました。

いつもいつも、この二人の間には何か昔からのつながりがあるのです。

真里砂と雄輝の両親が親友で、二人が小さい時から兄妹のように育ったのに比べ、鋭は一年前に転校して来たばかりの異邦人。

そして、真里砂と雄輝が二人にしかわからない小さい頃の話などして楽しげに笑っている時、いいえ、けんかをしている所を見てさえ、とても腹だたしく感じるのです。

それがなんのためなのかは鋭自身知らなかったのですが、それでも彼は腹だちまぎれにこう怒鳴りました。

「おいマーシャ、いくら突然おかしな事が起こったからって怖気づいたり狂ったりしないでくれよ。これこそぼくらがいつもあこがれてた冒険の始まりじゃないか。……チェッ！ 結局はきみもただの女の子だったんだな。非科学的で（これは本当だぞ。科学のテストの時はいつだってぼくが教えてやったんじゃないか）おしゃべりで、バカで、なんでも泣けばかたがつくと思ってるんだ。」

鋭はなおも悪口を言い続け、自分でバカな事を言っていると知りながらやめられない自分に、その自分を驚ろいて見ている雄輝に、そしてなによりも、これだけ言われても何の反応も示さない真里砂に、表現しがたい複雑な、ドロドロとした憎悪と腹だたしさを感じてやりきれなくなりました。

『今すぐ真里砂が怒りだしてくれれば、さもなけりゃ雄輝がぼくを

P4.

なぐり飛ばしてくれればいいんだ。そうすれば……………」

そうすればどうなるのか、うず巻きながら一時にあふれ出ようとするめちゃくちゃな気持ちがかえって鋭の口をふさいでしまいました。

一方、真里砂は鋭のそんな言葉や態度も一斉見えず聞こえず、ただ、ずっと昔に習い覚えたこの歌を不意に思い出したことを喜び、なつかしい響きを楽しむように最後の繰り返しを心をこめて歌うと、炎がそれに呼応していきおいを増したのを見て言いました。

「 マルナ セレ ナン （歌えたわ!）」

なぜならこの歌は火のいきおいを強くするための魔法の歌なのですから。

それから、真里砂は不意に気がついて顔を上げました。

「え？ なにか言った？」

鋭は、こうまで完全に無視されていたのかと思うと腹をたてるのもバカバカしくなり、同時に自分の言ったことを真里砂に聞かれないですんだので、少し気が楽になりました。

「ごめんなさい。あまり夢中になっていたので聞こえなかったの。何て言ったの？」

鋭が返事に詰まっているのを見て雄輝が助け船を出しました。

「おれが、おまえが昔魔法を使ったことがあるって言ったら、冗談だと思って笑ってるんだよ、こいつは。」

雄輝には先程からの鋭の不可解な態度がなになのか、さっぱり見当はつかなかったのですが。

『ま、誰だって突然ヒステリーをおこすのはよくある事だからな。』

鋭は雄輝に感謝しつつ、無理に苦笑いを作って言いました。

「まったくバカみたいな話だよ。ここに魔法でつれてこられたんだって言うんだ。」

鋭は自分の態度がおかしいと気づかれないかとそちらの方に気をとられていたので、魔法という一言で真里砂がそれとわかるほど顔色を変えたのに気づきませんでした。

「ぼくは次元のひずみではじきとばされたんだと思うんだけどね。……雄輝の童話狂いもいい加減にしてほしいよ。」

「なんだと、自分だってSF狂じゃないか！」

「SFは科学だ！」

「ファンタジの歴史の古さを知らないな。」

P5.

この調子だと、二人は本題をはずれていつまでもやり合うことになりそうでしたが、

「ナルニアだのミドルアースだの、全部空想上の別世界の話だろ。ここは地球だぞ。」

鋭が興奮してこう怒鳴った瞬間、真里砂はとうとうこらえきれずに笑いだしてしまいました。

最初はぼんやり、次には妙な歌を歌い出し、今度は気でも狂ったように笑いだす。雄輝はショックのあまりマーシャの気がふれたのかと一瞬疑ってみたほどでした。

「おいマーシャ！ どうしたんだ!？」

真里砂はなおもくつつと笑いながら言いました。

「地球……ですって？ 空想世界ですって?! ……あなたたちは、ここをどこだと思っているの！」

真里砂の瞳がくるくると色合いを変えて、不思議な光りかたをしたのはちらちら燃える焚き火のせいでしょうか。

「どこだと思うの……？」

真里砂はもう一度、尋ねました。

「それじゃやっぱり……」と雄輝。

「おまえには何がおこったのかわかってるんだな？」

「ええ、まあ、大体のところはね。」

意味ありげなこの会話に、鋭は何かしら背すじを走るものを感じました。

「いったい君らは何の話をしてるんだ?!」

真里砂はもう一度、あの、秘密を知っている者特有の謎めいた笑い声を立てました。

「ここはダレムアス。大地の国よ。」

そこまで言って、真里砂はようやく鋭の表情に気がつきました。

——いけない。鋭は本当に何も知らないんだったわ。

ぺたり、と火のそばに腰をおろして他の二人を誘います。

「わたしにわかっている限りは全部話すわ。でも、とても長くかかるの。」

雄輝はすぐに、鋭もしぶしぶながら腰をおろすのを見とどけてから、真里砂は半分目をとじ話し始めました。

『 2. 真里砂の記憶 』 (@中学1年か2年。)

[『 2. 真里砂の記憶 』 \(@中学1年か2年。\)](#)

2007年7月11日 [連載 \(2周目・大地世界物語\) コメント \(2\)](#)

2. 真里砂の記憶

「ここはダレムアス。そう、……そう言ってよければ地球の外よ。

ううん。他の星とかいう意味ではなくって、別の世界。SFの言葉で言えば異次元、て言うのかしら？ 地球と平行に存在しているパラレルワールドの一つなの。……わかっているわ鋭、あなたが言いたいことは、それをなぜわたした知っているのかってことでしょう？

簡単なことよ。だって、ここはわたしの故郷なのだから。わたしはここで生まれたのよ。」

鋭と雄輝の唖然とした顔を見て、真里砂はおかしくなりました。

「いつも言っていたでしょう、わたしはティカータ（つまり、ダレムアスの言葉で、地球人、て意味よ）ではないって。あなたたちは冗談だと思っていたようだけれど……。

『 3. 雄輝と鋭が見たもの 』（@中学2年？）

『 3. 雄輝と鋭が見たもの 』（@中学2年？）

2007年7月8日 連載（2周目・大地世界物語）

3. 雄輝と鋭が見たもの

『今夜は野宿』の覚悟を決めて、三人はパチパチと小気味よくはぜている焚き火を背に、それぞれが体験した不思議なできごとを話し合っていました。

普段、たとえば遠足ではぐれていたのが落ち合った時などだったならば、三人はお互いを見つけたとたんに、途中で見た景色のことやら、その感想やらをしゃべりだしたでしょう。でも今日おこったことと言え、およそ信じがたいことばかりで、案外今日あった事は全部夢で、わたしたちは単に霧の中で朝日ヶ森に迷い込んだだけなのじゃないかしらと、それぞれよけいな方へ想いを巡らせては話すきっかけを失って、とうとう夕御飯の後までのぼしのぼしにしてしまったのです。

みごとな夕焼色の空の下、枯れ草の土手に腰を降して、それぞれ離ればなれになっている時に見た物、感じた事、あの不思議な霧の正体についての推測などを準ぐりに話して行って、ちょうど最後に真里砂が話し終えた時、頭上に一番星が現れました。

それは、まるでマッチをすったようにいきなりぱっと輝やきはじめ、青空のジュースのひとしずくのような深く澄んだ光をあたりになげかけたものですから、真里砂はいっぺんに心の中まで明るくされたように感じました。

「アルテ！ ルマルウン デア！」

思わずそう言ってしまってから、真里砂は慌てて口をつむぎました。

「……いま、君、何語でしゃべったんだい？」

鋭が眉に唾でもつけたような奇妙な目をして聞き、一瞬、気まずい沈黙が訪れました。

ところが、じゃあ、やっぱりここは、と、瞳をきらきら輝やかせて雄輝が言ったのです。

おまえの生まれた国なんだな、と。

この一言は、かえって真里砂を驚かせました。

自分でも半信半偽でいるものを、いったいどうして雄輝にわかるのでしょうか？

雄輝がなかなか話したがらないので、真里砂と鋭が二人がかりで責めたてると、昔々、真里砂が有澄の家に現れたその日に、彼女が同じ言葉を使ったのだと白状しました。

「うそよ。わたしは覚えていないわ。いつ？」

(未完)

『 3. 袋のなかみ 』（@中学1～2年？）

『 3. 袋のなかみ 』（@中学1～2年？）

2007年7月7日 連載（2周目・大地世界物語）

~~—3. 袋のなかみ~~

~~—~~
~~真里砂、雄輝、鋭。~~

~~三人は焚き火を囲んで、わずかな食糧をせつせと日に運んでいました。~~

~~それというのも、先程 Pasta から渡された食糧には一人分しかなかったのです。——当然のことですが。~~

~~「ともあれ」と、そのことに気づいた時に鋭が言いました。~~

~~「これでこの事件の原因が真里砂にあるってことがわかったよ。ここの連中——さっきの有翼大種の仲間なんか——は、どういう方法でかは知らないけど地球にいる真里砂を呼びよせて……ほくら三人は手違いでまきこまれただけなんだってね。」~~

~~これは事実には違ひありませんでしたが、思いやりのある言い方とは言えないようでした。~~

~~むしろ、鋭としては悪気があって言ったわけではなく、むしろ巻き込まれたことを喜んで、真里砂に感謝したいぐらいだったのですが、そこは人一倍責任感の強い真里砂のこと、自分のせいだから危険なめにあわせてしまうかもしれないと思うと、鋭の気持を知ってはいても、どうも落ちつきません。~~

~~今だって朝日ヶ森学園にいれば、体育祭後夜祭の御馳走をおなかいっぱい食べられたはずではありませんか。~~

~~—それに、なぜだかわからないけれど、これはいつも憧れていたお話の申の冒険のようには終わらないだろうという予感がしました。~~

~~だからといって、どういう終りかたになるのかはさっぱり見当がつかなかったのですが……。~~

~~「さて、と。これからどうする？」~~

~~みんなが食べ終わった時に雄輝が言いました。~~

~~もちろん議論好きな彼らの事、これは「会議を始めようぜ」の合図だったのですが、転校生で朝日ヶ森の流儀に慣れきっていない鋭は、彼お得意の“科学的な”好奇心をおこして、先に Pasta の残っていた袋の申味を全部調べてしまおうと~~

~~（☆シャーペン描きで色鉛筆塗りのマーシャのイラストあり。「有澄真里砂（マーライシャ）12歳・朝日ヶ森学園小学高等部3年A級」のコメントつき。）~~

~~主張しました。~~

~~さっきは、食糧と火打ち金を見つけた所で、真里砂が、お腹がすいたし、風が冷たくなったと言いだして、奥の方の品物はまだ調べ終わっていないのです。~~

~~真里砂も鋭に賛成しました。~~

~~「もしかしたら、なにか手掛かりになるような物が入っているかも知れないでしょう。」~~

~~議論の種が増えるとあらば、雄輝だって反対しようとは思いません。~~

~~次々にひっぱり出した小さな包みや袋を、順々に開いてゆき、それを鋭が、運よくポケットに入っていた、体育祭用の得点表の裏に書きとめました。~~

~~—まず、さっきの食糧袋。~~

~~乾燥させた果物と、乾パンとおせんべいの合いの子のような固いお菓子が—包みづつ。袋に入っていた強飯（こわいい）の乾したものと干魚少量。~~

~~—(肉類がないわ、と真里砂。)—~~

~~小型の辞書ぐらいの大ききの木の箱には、火打ち石と火打ち金、それに塩とハチミツが入っています。~~

~~それから、ふたが深皿になる小さな白いゆきひらと、中華料理に使うような、おたまのような匙（きじ）。~~

(※没原稿マークのバツテン印で消してある※)



2007年6月15日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

◎就学年齢の年に、皇女は隠れた館で
育てられるため大つ森に向かったが、
ボルドムにおそわれ(!?)絶体絶命の
ところを白狐に引き入れられ、
夢が夢中で反対側に飛び出してしまった…… 資料No.1

一、

少女が森の中の有澄（ありずみ）夫妻の別荘に現われたのは、昭和の時代が終って新しい天皇が即位してより六年目のことだった。

十月の高地の嵐の晩に、別荘の裏手を流れる急流の天然のダムに打ちあげられていた所を有澄夫人に発見されたのである。

三日三晩の生死の境をさ迷う高熱が引いた後、小女の心の中には過去の一切の記憶が既に残っていなかった。

が、不思議なことに、この少女は自分に記憶がないことになんの恐怖も疑問も抱かないようであったばかりか、長い戦いが過ぎて久し振りの休暇をもらった戦士のような一種の雰囲気、一開放された者の明るさ——さえ持ち合わせていた。

少女は明るく、愛らしく、無邪気で、慣れぬ耳には絶えず旋律の変化する歌のようにも聞こえる風変わりな言葉を使い、（有澄夫妻には通じないのは承知の上で）しょっちゅう楽しげに話しかけた。

まるで生まれたばかりのまだ空を飛べそうな赤ちゃん（バリの『ピーターパン』参照）のようだったと後に有澄夫人が語っているが、とにかく言葉が通じないのではしかたがないと夫人が身振り手振りを混えて教え始めた日本語を、あっという間に驚くべき速さで身につけてしまった。

一月もたつうちには、発音や言い回しを別にして、年相応に（推定で6歳前後と見られた。）正確な日本語をしゃべることができるようになったのである。

(★「昭和の時代が終って新しい天皇が即位してより六年目」
.....と、いう、文章を書いていたのは、私が中学校の頃だから、つまり
昭和の50年代前半です☆ (<「近未来FT」だったのね~☆)

(☆「コクヨ ケ-60 20×20」原稿用紙、シャーペン縦書き。)

これを読んでくださるもう大人になってしまった方々へ

——童心にかえって読んで下さい。

これを読んでくださるまだ大人に、なっていない方々へ

——わからないところはじぶんでじしょをひいてね

P1.

序.

その昔、皇女（おうじょ）マーライシャがまだ幼なく、現実よりも、ふわふわとした突拍子もない夢の中に暮らしている方が多かった頃、父皇（ちちおう）の片腕たる、がんこ頭の『曲（まが）り赤松』・トーザン卿にこんな質問をうけた事があるといえます。

「皇女（ひめ）さまが大きくなられたら、一体何になるおつもりなのですかな」

それというのも、マーライシャには、地球式に数えたなら六つ違いの兄上、マリシアル皇子がいて、彼が皇位につくことになっていたし、勝気な皇女（おうじょ）のこと、普通の皇女（ひめみこ）や王女（おおきみ）が望み夢見るような少女らしい憧れは持たぬだろうと、トーザン卿は思ったのです。

少々からかいをこめたこの質問を、幼ない皇女は真顔でうけて、さらりと、こう言ってのけました。

「わたしは、大人になったら男の子になって、兄上の右腕として戦さにでます。」

皇女は決して俗に男女と呼ばれる類（たぐい）の乱暴な少女ではなかったのですが、この時からすでに『男の子』になって少年たちと駆け回ることを夢見ていたのだそうです。

はっはっは、と、皇（おう）の愉快そうな笑い声が、南に張り出した一段高い庭の、低い石垣の上から聞こえてきました。

そうかそうか。このあいだまでは戦（いく）さ乙女（おとめ）になるとか言うていたのに、ついにそんな事を言いだしたのか。……しかし、大人になったら男の子とは……はははは。さすがはわたしの娘だけある。」

「笑いごとではございませんぞ、皇（おう）よ。実際、皇女（ひめ）のお転婆（てんば）は少し度が過ぎます。」

「良いではありませんか。あの子はわたくしの血を受けて身が軽いのですもの、少々高い木や塔の上に登っても、危険なことはないでしょう。」

「しかし女皇（めのきみ）、マーライシャ様は年も満たぬうちから馬や弓のみならず剣の稽古（けいこ）まで始めているのですぞ。」

女皇（めのきみ）、とは、もちろん皇女の母フエヌイリ姫のことです。

P2.

姫にはトーザン卿の苦い顔七た様子（きま）がおかしいらしく、五月の森と歌われた美しい緑色の髪をふるわせて、あきらかに人間のそれとは異なった、泉の湧くような澄んだ笑い声をたてました。

その立ち姿の麗（うるわ）しさといったら笑んだ口もとの指先から銀の光が飛びちるようです。

「知っておりますとも。なんといってもわたくしがそれを許したのですから。

そろそろわたくしたち精霊の天翔（あまか）ける技（わざ）を教えてみようと思うのですけれど。」

「本当!? お母さま！」

いきなり頭上からはずんだ声が降（ふ）ってきて、屋根の上で立ち聞きしていたマーライシャは、礼儀をわきまえぬ行（おこな）いをたっぷりと叱られて、それでも次の誕生式から『お空の歩き方』を教えてもらえることになりました。

「叔父さまみたいに最果（さいは）ての月立（つきたち）の国までも飛べるようになるかしら？」

「いいえ、わたしはうんとたくさん練習して、お月さままでだって飛べるようになるの。」

「それではおみやげにうさぎ大（びと）のおもちをとってきてもらえますかな？」

「ええいいわ、トーザン卿。……でも、うさぎ大（びと）はすぐにおもちをくれるかしら？ なにかかわりにあげるものを持ってゆかなければだめかしら。」

皇と女王は目を見かわして微笑（ほほえ）みました。

かわいい二人の宝。

彼ら流の数え方でやっと18年目、幼児期の終りにさしかかろうかという皇女に、月（レリナル）とこの大地の国（ダレムアス）の間にひろがる距離がわかるはずもなく、無邪気に行けると信じるその愛らしさは、国と国とのもめごとや国民の幸福といったものによる心の痛みや疲れを、すぐにいやしてくれるのでした。

けれども、フエヌイリ女皇と皇女との約束は遂に果たされませんでした。

ちょうどマーライシャの誕生式に前後して始まったあの『異変』が、皇と女皇から平和な団欒（だんらん）の時間をうばってしまったのです。

大地に住む人々（ダレムアト）にとって最も大切な母なる大地は小刻（こきぎ）みに震え続け、

~~青天（せいてん）には霹靂（へきれき）が、獣たち家畜たちには恐怖が訪ずれました。
ダレムアス全土の国々を統べる、女神の子孫たる皇には休むいとまもなく、ただちにダレムアス
申の力有る者たちに招集をかけました。
かの血なま臭い戦国時代より、皇家五代の長きに渡って封じられていた、ルア・マルラインの『
会議の間』の扉が遂に開かれることになってしまったのです。
—けれどマーライシャにとってそれが意味するところは難しすぎて、幾度となく裂ける天を恐ろ
しく思い、聞きかじった父皇たちの話から何事かがおそろうとしていることを感じとりはしまし
たが、それでも何よりも悲しく思ったのは、母ヲエヌイリ女皇がいなくなったことでした。
アイデルヲ皇と結ばれてルア・マルラインで暮らすようになってからも、精霊の一族（エルヲ
エン）としての彼女の魔力の強さは変わらず、~~

「 Martia [Marlitia]」なるタイトルで、「K子姉・筆」と私が注釈を入れている、シャーペン描き
に色鉛筆塗りの、稚拙なイラストあり。

.....この頃すでに1歳半上の姉よりも私の画力のほうが上達してしまい、それがバレたら虐待を
受けるのは明白だったので.....、

必死で姉の目から自分の画帳を隠していたために、まだ自分のほうが「絵が巧い」と思い上が
っていた姉が、勝手にエラソウに「イラスト、描いてやったぞ！」と、ひとのノートにラクガキ
しやがったのでした.....o(^ ^ ;)o”

コドモ心に傷ついた。なんで私は「虐待（暴力）」を怖れるあまり、自分の描きたい絵を堂々
と描いて、誰かに見せて誉めて貰いたい、という成長途上の子どもとして当然の欲求を、満たす
ことが出来なかったんでしょうか.....。

（※ で、そのすぐ後に結局、実力全開で描いていた漫画の練習帳を姉に目撃されてし
まい.....「ふうふう～ん.....★」と、ものすごい目で睨ま
れて.....

今に至るまで続く、実姉による暴力支配（虐待or家庭内暴力）の日々が、始まってしまったので
した..... (T_T)”

私の「基本的人権」って.....どこよ？

と、実家や親戚宅に顔を出すたびに思う人生って.....

って、.....あ、全然本文とは関係のないオハナシでしたっ★

||||(-_-;>"||||

「皇女（ひめ）が大人になったら、何になるおつもりかな」（@中二～中三の春休み？）

[『（かなり大幅な設定追加／変更メモ）』（@中二～中三の春休み？） 続きの次々頁](#)
2006年7月14日 [連載（2周目・大地世界物語）](#)

かの皇女（きみ）マーライシャが幼少の頃、叔父上フェルラダルにこのような質問をされたという。

「皇女（ひめ）が大人になったら、何になるおつもりかな」
それというのも、マーライシャには、地球式に数えれば六つ年上の兄皇子がいて、皇位は彼がつぐことになっていたのです。

それに答えて皇女いわく

「わたくしは大人になったら男の子になります」
大まじめな顔をして答えたという。

《ダレムアス》

《ダレムアス》

『ダレムアス』 (@小学校4～5年?)

2006年7月8日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

その日は朝からとても良い天気だった。

6月の中ば、真里砂のいる白百合学園は運動会のまっ最中。

ダーン!! 中等部1年のしょう害物競争がスタートした。

真里砂はぐんぐんとスピードを上げ、回りの者をおいこし、次々になんかんをくぐりぬけて行った。

最後の飛びばこは、よじのぼるための物で、12だんもあったが、真里砂はものともせず飛びこした。

そのしゅん間、観客は底しれぬ恐ふにおそわれた。

突如あいた黒い穴に彼女がすいこまれてしまったのである。

ピストル系の少年……中等2年で、真里砂と同じ童話クラブの雄輝と言う少年……が、かけつけた時はすでに穴はしまりかけていた。

雄輝は決然としてその穴に飛び込んだ。

穴の中は暗黒のやみでどこまでもはてしなく広がっていた。

気がつくとき雄輝は、気を失なって横たわった

真里砂のとなりに立っていた。

そこは、森の中の小さな空地で、小島のの声だけしか聞こえなかった。

突如、かたわらの切りかぶが横に物動くと

中から女の人が見られた。

その人は、雄輝を見ると、少しおどろいたようだったが、真里砂をだきあげると、雄輝についてくるよう合図した。

雄輝は、その人が なにか不思議ないんしょうをあたえるのには気づいていたが、それがなにかはわからなかった。

しかし、それ以外の方法もなかったので、

その人のあとについて、せまい通路をおりていった。

長いかいだんをおりるうちに、雄輝は

女の人の長いかみの間から、ウサギのような、

白い耳が つきだしているのに気がついた。

2人は無言のまま下へ下へとおりて行った。

~~「おい、真里砂、しっかりしろよ。」~~

~~「起きろよ、真里砂！ いったいどうしたんだ？」~~

~~「.....ここはどこだろう？」~~

すぐそばから静かなひくい話し声でが聞こえるてきた。

真里砂は、ふっと 目を覚ました。

あたりは暗く、うすいカーテンごしに淡い光がさしこんでくる。

< カーテン？ 私のベッドにカーテンなんてないはずだわ。 >

そう言えば 話し声も聞きなれた母さんたちの声ではなかった。

真里砂は起きあがってカーテンを開けた。

「あ！ 王女様、まだ起きてはいけませんわ。」

「ヤア、真里砂、気がついたか」

二つの声が同時に起こった。

そこにいたのは、なんとも奇妙な人たちだった。

1人は真里砂の友達 雄輝 (ユウキ) 翼 (ツバサ) 雄輝 (ユウキ) だったが、

あとの2人二匹？ は、

体じゅうが白い やわらかい 毛におおわれている。、火のように赤い目をした。やき

七い顔をした女の人だった。

けれども その婦人たちのもっとも大きな特長は、うさぎのような.....と、言うよりは

、うさぎそのものの.....耳にあった。

真里砂はキョトンとしてうさぎ人をみつめていた。

それから、くるりとふりむくとかたわらにいる雄輝に話しかけた。

「ねえ雄輝、これは本当に起きた事なの？

それとも空想のつづき？」

「ドン・ラムス (※) に うさぎはいなかったと思うね。王女様？」 雄輝が笑って答え

~~この会話を笑いながら聞いていた、~~

~~一年上の方のそのとき うさぎ人が口を開いた。~~

「夢でも空想でもありませんわ、王女様。

気分がよくなられたのなら早く旅のしたくをして下さいな。」

「王女様？ 旅？ 何がなんだかさっぱりわからないわ。

説明してくれない？」

そこでうさぎ人は話し始めた。

「私たちもくわしい事はしらないのですが、

知っている事は全てお話ししましょう。+

-----うさぎ人、スノウの話-----

「今から12年ほど前の事です。長老.....とてもえらい方なので.....が、おそろしい
予言を下しました。

私たちの国 ダレムアスがに、未知の国ボルドムにがせめられると言うのです。せめ
こんで来ると言うのです。

カサール王は、そのころメシール王 女王

そして、その危機 を乗り越えるために、ちょうどその頃お生まれになった、マーシ
ャ王女を 別の世界「地球（ティケ）」へ

送ったのです。ここでスノウは一息ついた。

「その王女と言うのが私なのね？」と、真里砂がたずねた。

「ええ、そうです。マーシャ様。あなたは王女様は『地球（ティケ）』で12年間、

『地球人（ティクト）』の学問を学びました。に育てられ、の間で生活し、

今、長老の力によって ダレムアスへもどって来たのです。

カサール王もメフィラ女王も今は亡き方ですが、

兄上であるヤスカ王子様はいずこかへ山中へ逃げのびたと聞いて

いますし、長老もお元気でいられます。聖なる滝でまっておられます。

ですから、ボルドム軍をもとの世界へ追いもどす事も

けっして夢ではありません。ないのです。」

言葉を切った うさぎ人（びと）スノウと言う名前だった。

は 深いため息をついた。

若い

(※ドン・ラムス – 真里砂と雄輝の空想物語の中の国)

(無題／下書き) (@小学校5～6年?)

『 (無題／下書き) 』 (@小学校5～6年?)

2006年7月9日 連載 (2周目・大地世界物語)

青い空に にぎやかな かん (?) 声がこだまし、
するどいピストルの音が響いた。

ここ「朝日ヶ森」学園体育祭の呼びもの、500Mしょう？
害走

がスタートしたのだ。

トンネル、ネット、平均台などをくぐりぬけ最大のなん
？関

.....12だん？の飛び箱.....にさしかかった選手たちは
やっきになってそれを乗りこえようとしていた。

その時、1人の少女が大きくジャンプすると
みごとに飛びこえた.....。

ひみつ日記

白百合学園 (笑) が、「朝日ヶ森」に進化しています。

.....たぶん、「アサヒガモリ」という名称の、初出原稿？

「10月14日。朝7時15分。」 (たぶん小学6年?)

「10月14日。朝7時15分。」 (たぶん小学6年?)

2016年1月29日 リステラス星圏史略 (創作)

10月14日。朝7時15分。

いやな夢を見たあとで時計にたたき起されるのは、どこのだれにとってもいやな事でしょうが、今日のマーシャは特に不機嫌でした。

「よりによってこの大事な日に寝坊するなんて!!」

そう。今日は朝日ヶ森学園の体育祭の日で、しかも今年はマーシャの誕生日と重なったのです。それで早目に起きて体を慣らしておこうと思ったのに、いったいどういうわけで目覚ましが狂ったのでしょうか。

起床時間より1時間近くも遅れて鳴りだしたのです。

あわてて食堂にかけこめば、案の定、空席がありません。

そこが全寮制の辛いところで、お盆を持ったままウロウロしているとありがたいことに雄輝が声をかけてくれました。

2人は親同士がとても仲が良く、小さい頃から一緒に育てられ、ことに雄輝の両親が事故で一度に亡くなってからは兄妹同様に暮らしていたのです。

『大地の国（ダレムアス）物語 皇女戦記編 第一部 第一章 ... 故郷（ふるさと）へ帰るとき ... 』（@小学校6年or中一？）

『大地の国（ダレムアス）物語 皇女戦記編 第一部 第一章 ... 故郷（ふるさと）へ帰るとき ... 』（@小学校6年or中一？）

2006年7月9日 連載（2周目・大地世界物語）

（注： マンガとも絵本ともつかない、
「挿し絵の多い童話」みたいなものを
描こうとしていた時期の、
「絵物語」のタイトル（レタリング？）文字と、
「表紙絵」の下描きだけのやつ.....☆）が現存。

シャーペン描きの為、スキャナでとりこめないのが.....以下同文.....☆)

(「魔法の国の真里砂」)

(「魔法の国の真里砂」)

『 第一章 魔法の国の真里砂 (1) 』 (@たぶん小学校6年。.....の夏休み、かな?.....)

[『 第一章 魔法の国の真里砂 \(1\) 』 \(@たぶん小学校6年。.....の夏休み、かな?.....\)](#)

2007年6月22日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

第一章

魔法の国の真里砂

1、 運動会

ダーン!! ピストルが音高くひびいた。

最前列の選手が一斉に走り出す。

中等部女子の障害走が始まったのだ。

二列目にいた真里砂は前列の選手たちを見ながら

ほほえんだ。

——結局**20000m** (メートル) のコースを走りぬける人は少ないんだわ。——

事実、じょじょにむずかしくなる障害物の前で

立ち止まる者が数多くいた。

真里砂がどのぐらいの速度 (スピード) で走るか考え始めた、

その時、ピストル系の少年が話しかけて来た。

「この分じゃ真里砂 (※マーシャ) が優勝だな！」

「ありがと！ 翼 (つばさ) 先輩」

真里砂はふざけて答えた。

(※真里砂の愛称 (ニックネーム))

翼 (ツバサ) 雄輝 (ユウキ) は陸上部の先輩だが、真里砂とは

親しかったので、ふだんは名前呼びあっていた。

「ねえ、雄輝 (ユウキ)」 真里砂が話し始めようとした時、

「おーい！ いつまでまたせる気だあ？」

しびれをきらした観客がさげんだ。

一列目の選手達はとっくに林間コースへ移っていたのだ。

雄輝はあわてて席にもどった。

「用一意！ ダア——ン！」

真里砂は飛び出した。

だんだん高くなっていくハードルを全部飛びこすと、

次はロクボクの間綱わたり.....etc.....

次々と出てくるむずかしい障害物の前に

何人かの仲間が落後していったが、真里砂は

走りつづけた。

4000mある林間コースを通りすぎ、校庭に出ると

1段から**12**段までの飛び箱がならべてある。

残っていた者の半数近くがキケンを申し出たが

真里砂（マーシャ）は進み続けた。

最後の**12**段に飛びつき、飛びおりようとした瞬間

すべての声が、かき消されたかのように止まった。

飛び箱の下のマットが突如消えうせ、いやその下の大地まで
が暗黒の空間に変わってしまったのだ。

真里砂は音もなくすいこまれて行った。

1秒**2**秒と時が過ぎていったが、だれも身動き

する者はいなかった。

1秒 **1**秒が恐しく長く感じられた。

その時、消えかけていた暗黒の穴（ブラック・ホール）の

中に**1**人の少年が飛びこんだ、続いてもう**1**人.....

暗黒の穴（ブラック・ホール）は完全に消滅した。

長い長い時が過ぎた。ふいに**1**人の女性が泣きだした。

真里砂（マーシャ）の母親だった。

(※大学ノートに鉛筆書き。直しの嵐☆) (^◇^;)”

『 第一章 魔法の国の真里砂 (2) 』 (@たぶん小学校6年。.....の夏休み、かな?.....)

[『 第一章 魔法の国の真里砂 \(2\) 』 \(@たぶん小学校6年。.....の夏休み、かな?.....\)](#)

2007年6月22日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#) [コメント \(1\)](#)

真里砂は気を失なっていた。

5000mの全力しっ走の後(のち)、疲労した体で暗黒の穴(ブラック・ホール)に落ち込む事は彼女にとってさえ少し衝撃(ショック)が強かった。

そこはほの暗い森の中の小さな空き地で、かたわらの小川がさらさらと音をたてて流れていた。

そして、太陽はたった今しずんだばかりで、まだなごりおしそうな夕焼雲(あかねぐも)が最後のわかれをつけていた。その時、小川のわきでカチッという音とともに明るい炎がもえ上がった。

「ふう! やっとついたよ、先輩」
音をたててもえるたき火のわきには二人の少年がすわっていた。

1人は翼 雄輝——真里砂の先輩——で、もう1人は 真里砂と同級の 清峰(キヨミネ) 鋭(エイ) だった。この二人は真里砂の後を追って暗黒の穴(ブラック・ホール)に飛び込んでいた。

「真里砂は? 先輩」と、鋭が聞いた。
「まだねむっているよ」と、雄輝が答えた。

すると
「もう起きてるわよ!」と、鋭の背後で真里砂が笑った。
「この妖精の国(フェアリーランド) 自体が夢なら別だけどね」
「妖精の国(フェアリーランド) だって!？」鋭と雄輝が同時にさげんだ。

信じがたい話だったが、真里砂は本気だった。

かと言って真里砂が、あれしきのショックで気が狂ったり、夢と現実をとりちがえるとは思えなかった。

「じゃあ、きみはここが.....地球(テラ) じゃないっていうのかい?」
「地球(テラ) どころか、別次元らしいわよ」真里砂はかたをすくめていった。
「私がねむっていたらね、だれかが私の名前を呼んでいたのよ。」

『真里砂（マーシャ）、王女（プリンセス）真里砂（マーシャ）』てね。」

——<王女（プリンセス）だって!?!>——鋭はおどろいたが、
口には出さなかった。

作家志望である真里砂が自分の話しをじゃまされるのを
とてもいやがることを彼はよく知っていたので、
真里砂は話しを続けた。

「私が目をあけると、そこに三人の人が——
人といえるならの話しだけど——すわって、
いいえそうじゃないわね。

——とにかく、私の顔をのぞきこんでいたのよ。

一人は 美しい黄金（こがね）色の髪を持った女の人で
不思議な事に 下半身がまっ白い馬の体でね、
その人が私に言ったの。

『ああ、やっとお目がさめたようですね王女（プリンセス）』

その声は黄金（こがね）の鈴のようにやわらかかった。

『急ぎましょう。人間（ティクト）たちが来るかもしれない』

と、その人の後ろにいた山羊足人（フォーン）が（本当に山羊足人
（フォーン）だったのよ、あなたたち、わたしの話、信じてないわね）」
真里砂はあわてていった。

あらわれたの、そして何だか意味のないような
事をさげんだのよ

『ウェルズ橋（ブリッジ）に月（ムーン）が来た！』てね。
とたんに四人ともかき消えたように見えなくなって
みんなのいたあたりにこれがのこっていただけだったのよ。」

真里砂は話し終わると後ろから大きなつつみを四つ
とりだした。

その中の三つは かれ草色の布ぶくろで
リュックサックほどの大きさだったが、
もう一つは 丸い銀のお盆に うすもも色の布が
かかっているだけだった

「そのお盆の中味が夕食でないとしたら
ぼくを まぬけだと思っていいよ！」

鋭が楽しそうにいった。

彼は 朝食のサンドイッチから後、何も口にして
いなかったのだ。

「先に その荷物の中を見た方がいいんじゃないかな」

雄輝が考えながらいった。

「私 うえ死にしちゃうわ！」と、真里砂が悲鳴を上げた。

「私が**5000m**走ったんだって事忘れないでよ」

その一言で 事は決まった。

『 第一章 魔法の国の真里砂 (3) 』 (@たぶん小学校6年。.....の夏休み、かな?.....)

[『 第一章 魔法の国の真里砂 \(3\) 』 \(@たぶん小学校6年。.....の夏休み、かな?.....\)](#)

2007年6月23日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

お盆の上にはルビー色の液体の入った水差しと、
——雄輝はワインだと思いました——

湯気を立てているシチュウの入った大きなおなべ
がありました。

「あれっ！スポンやお皿がないや？」

最初その事に気づいたのは鋭だった。

つづいて真里砂も言い出した。

「コップもよ！ そちの大きい包みに入ってない？」

そこで三人はめいめい一つづつふくろを開けて

みる事にした。

雄輝がふくろをしらべてみると、それぞれ、色のちがうひもで

口の所をくくってあったので、

彼は青いひものかかったふくろを選び出して少し、ひものはじを

ひっぱって見た。

「開けたら **ドカ——ン！** なんてことにならないだろうね」

と、鋭が笑いながら言った。

「もっとも、殺すんだったら、食事に毒をまぜた方が、早いけどね！」

「たとえ毒入りであろうとも.....、ええい。このひもほどけないな

.....ぼくは食べるね！ 空腹でぶったおれそうだよ。

.....ああ、やっと開（あ）いた。」

「わ！なにが入ってる？」とあとの二人がのぞきこんだ。

雄輝がふくろの中に手をつっこむと、すぐに何かかたいものにぶつかった。

「イテッ、これは何だろう？ 手の甲をすりむいちゃったよ。——

やあ！これは剣だよ。しかも本物だ。.....

束に何かついてるけど、暗くて見えないな。火のそばへ行こうよ。」

その剣は長さが**50cm**ほどで、黄金（こがね）細工のさやには

海のように深い青色をした宝石が、ちりばめられ、

それに光があたってキラキラとひかり輝いていた。

「ほら！こっちのふくろにも同じのが入ってるよ！」

さっきから 緑色のひものふくろと とっくんでいた鋭が呼んだ。

彼の手にも光輝く黄金の剣（つるぎ）がにぎられていた。

「あらっ？でも少し違ってるわ。ほら、こっちの剣、さやについている宝石（いし）青いでしょう？ 鋭 のは緑色だもの」

「へえ、本当だ。他の所は寸分変わらず同じ造りなのにな。」

「私、こっちのふくろも開けてみるわ。これにも入ってるかもしれないもの……」

こう言って真里砂（マーシャ）は赤いひものかかったふくろを取り上げた。

「あ、あったあった。これにも剣が入ってるわ。……」

！ ちょっと来て、この剣（つるぎ）は銀製よ、他のと違うわ！」

確かにその剣は他の二本とは違っていた。

第一に それは 輝くばかりの白銀でできており、束とさやには炎のようにゆらめく光を秘めた真紅の石がはめこまれていた。

そして、他の二つの剣よりも小型で、真里砂の身長にぴったりあう大きさだった。

それぞれに剣が一本づつか！ 他になにが入ってるのが見てみようよ。」

と、雄輝が言った。三人がめいめいのふくろに手を入れると一番ほしがっていた物———コップとお皿とスプーン———が入っていた。

「やっと食事が食べられるわ！ でも、この底の方に入っているのは何かしら？」

「先に食事をしようよ。“腹がへっては戦（いく）さができぬ、だよ」と、鋭が言った。

「賛成！」と、あとの二人が同時にさげんだ。

みんな胃ぶくろがからっぽだった。

しばらくの間、森は静かになった。

聞こえるのは ただ、三人の使っているスプーンがお皿にあたってコトコトいう音とたき火がパチパチとはぜる音だけだった。

シチュウはととてもたくさんあったので、三人がめいめいたっぷり取っても、まだ少し残っていた。

「それ以上おかわりしようなんて気はないでしょうね」

「今日の所はね。明日になればもっと食べるよ。」片目をつぶって鋭が答えた。

「さあ！」雄輝が立ちながら言った。「ふくろの中味を全部調べちゃおう。」

雄輝と鋭はそれぞれ受け持ちのふくろ（最初に自分で開いたやつ）を取って、中味を地面にぶちまけた。

しかし、真里砂はそうはしなかった。

「だって、こわれものが入っているかもしれないじゃない。」

これは非常に懸命な考えだった。

なぜなら、彼女のふくろには小さな方位磁石がはいっていたので。

そしてそれには細い銀のくさりがついていて首にかけるようになっていた。

「なんて細かい細工なのかしら！ 剣にスプーン、ナイフやフォークも。まるで童話に出てくる小人の細工物みたいだわ。」真里砂が一人つぶやきながらそれを首にかけようとした時、

「そのとおりじゃ！」

真里砂の背後でわれ鐘を打ち砕いたようなさもなければ大砲を百発同時に打ったようなものすごいドラ声が響いた。

もちろん鋭や雄輝の声ではない。

ではいったいだれがいるというのだろうか？

真里砂はこわごわふりむいた。

しかし、後ろにはだれもおらず、ただ5mほど向こうにある老かしが、さもゆかいそうに枝をゆすっているだけだった。

『 第一章 魔法の国の真里砂 (4) 』 (@たぶん小学校6年。.....の夏休み、かな?.....)

[『 第一章 魔法の国の真里砂 \(4\) 』 \(@たぶん小学校6年。.....の夏休み、かな?.....\)](#)

2007年6月23日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

「だれかいるのかい!？」

おどろいてかけつけてきた二人が同時に聞いた。

「わからないわ、ただ.....すぐ後ろでだれかどなったんだけど、ふりむいたらだれもいなくて.....」

「ハハア、さては宙に飛んだか地にもぐったか.....」

「まじめにやれよ、鋭。いったいなにもものなんだろうな？」

「いくら話したって結論は出ないわよ、ここは魔法の森だもの。いくらでも想像できるわ。」

真里砂が肩をすくめて言った。

「また真里砂(マーシャ)の童話狂いが始まったね!

ぼくは別の惑星だと思うんだけどなア」

それを聞いて雄輝がふき出した。

「それを言うならきみだって**SF**気狂いじゃないか!

そんなことより真里砂(マーシャ)の荷物は全部見たのかい？」

「いいえ、まだよ。この方位磁石を見ていたら声がしたんですもの」

「じゃあ早いとこ調べよう。それから会議だ。」

彼がふくろをひっくりかえすのを見て真里砂はためいきをついた。

——<とにかく、方位磁石だけは無事だったわよ.....>——

彼らは議論が好きだった。

それは、彼らが小さい時から通った朝日ヶ森学園が、すべて生徒会議の決定にたよっていたせいもあるし、ギリギリの瞬間まで頭を働かせて相手を降参させるのはスポーツではあじわえない独特なスリルがあった。

そこで、彼らはたき火をかこんですわると話し始めた。

「まず第一の疑問はここがどこかってことだよ。」

「それからなぜここへ来たのか、ね。偶然なのか、それともだれかにつれてこられたのか」

「.....きみが王女(プリンセス)だってのも気にかかるな.....

それにこの荷物! どうも旅の仕度に思えるんだけど

.....この住民——真里砂（マーシャ）の言う山羊足人（フォーン）や妖精（フェアリー）——は、ぼくたちの事をどう思っているのかな。」

「きりがないわね！ 紙と鉛筆があるといいんだけど」
雄輝がポケットから採点用紙をひっぱりだして、鉛筆と
いっしょに真里砂にわたした。

「今日はもう使わないからね。」

疑 問

結 論

1. ここはどこか
2. なぜここへ来たのか
3. 私が王女だということ
4. 荷物はなんのためか
5. 住民はわれわれを
どう思っているのか

「まだあるわ。ねえ、あなたたちはここへ来た時、
こわかったって言ったでしょう？ でも、私、たしかに
こわいし、おどろいたんだけど、同時に うれしくて
なつかしいような気分におそわれたのよ。」

しばらく沈黙がおとずれた。

パチパチと火のはぜる音がここは別世界なのだと
語っていた。そして、いつになったら両親のもとへ帰れる
のか、いや、帰れるのかどうかもわからないということ。

「こういう仮説がなりたたないかな.....。」

雄輝がふいにしゃべり出した。

「真里砂（マーシャ）、きみが今の両親——有澄のおじさんと
おばさん——の本当の子じゃないってことはみんなが知ってる。」

((真里砂の体がピクッとふるえ、鋭がするどくさげんだ。))

「先輩！ そのことは.....。」

「わかってるよ、真里砂（マーシャ）が内心そのことを気にしている
ことも、みんなが気づかって口に出さない事もね.....。」

雄輝は言いにくそうに口を切った。

[『 第一章 魔法の国の真里砂 \(5\) 』 \(@たぶん小学校6年。.....の夏休み、かな?.....\)](#)

2007年6月24日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

「でも大事な事なんだ、真里砂（マーシャ）。
きみが有澄家の前で泣いていたのはたしか
9年前——いや、10年前の今日だったね。
その日がきみの誕生日になったんだから。
きみは捨て子で、3才以下の時の記おくはまったく
わからない、それに髪の色がふつうの人とは
ちがう。」

「それがどうしたって言うの!! そんな事は
気にするなって言ってくれたのは雄輝じゃないの。」
さっきから歯をくいしばってふるえていた真里砂は
それだけ言うと泣き出してしまった。

「ひどいよ!先輩。いくら真里砂（マーシャ）が気が強く
たって、女の子にそうはつきり、言うことないじゃ
ないか!」 鋭は、まだ自分では気づいていなかった
が、真里砂が好きだった。

だから、真里砂が悲しむのを見たくないのだ。

「ちがうんだ。ぼくが言いたいのは真里砂（マーシャ）が——
真里砂（マーシャ）の両親が、この世界の人間——住人じゃ
ないかと思うんだ。」 恐ろしい沈黙が訪ずれた。

この考えはほかの二人の心にもあったが、
とても信じられない、いや信じたくない事だった。

「でも、——もし、それが本当の事だとして——
たしかに真里砂は妖精みたいに身が軽いし、
髪は地球人ばなれした緑色だからね——。
なぜ、地球に 捨てられていたんだろう?」

「わからないわ。でも.....でも、私、本当にここの
この世界の娘なのかしら?」

真里砂が涙をふきながら言った。

あまりにもめまぐるしくいろいろな事が起ったので、
いまなら何を言われても信じられるような気がした。

「たぶんね、それも王家の血すじなんじゃないかな。」

王女様（プリンセス）——。」

雄輝も鋭も王女（プリンセス）という肩書は真里砂にぴったりだと思った。

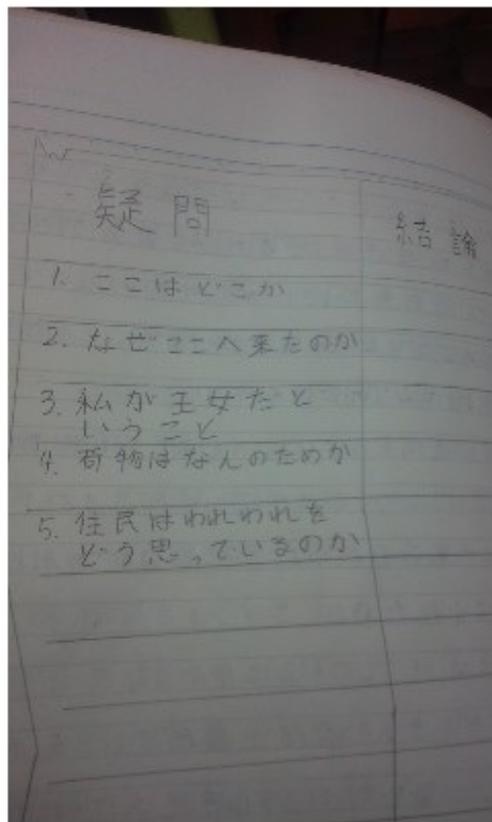
たき火が音たててはぜた。

もう話すこともつきたように思われた。

「今夜は野宿だわね。」 真里砂が言った。

「うん。」 と雄輝が答えた。

再び沈黙が訪れた。



『 第一章 魔法の国の真里砂 (6) 』 (@たぶん小学校6年。.....の夏休み、かな?.....)

2007年6月25日 連載 (2周目・大地世界物語)

森の中はしんと静まりかえっていた。

たき火には土がかぶせられ、(こうすると、少しのたき木で一晩火がもつのだ) すきまから細いけむりがたなびいていた。

木々の上に大きくて明るい満月が顔を見せ、地上に光と影を作った。

それは、地球の月の倍ほどもあり、この上もなく美しく、さえざえとした銀色の光をはなっていた。

そして、身が軽く翼の強い鳥たちならば、一日で行って帰ってくるができるくらい近くにあった。

さて、月がゆっくりと上がってくるにしたがって、木々の葉ずれの音のようなささやきが森中に広がった。

それは、ごくわずかなざわめきだったのだが、真里砂たちは気づいて、体を起こした。

「なんだ、あなたたちも起きていたの。」

互いに、他の人は寝たのだろうと思いながら考え事をしていたのだった。

「あの音は何なんだろう？」 鋭が言った。

「風もないのに木々がザワついているね。」

しばらく三人は無言のままその音を聞いていた。

そうするうちに、その音はどんどん大きくなり、かすかな地鳴りのような響きをともなった、たからかな歌声にと変わっていった。

その声は地の底から響くのかと思えば、次には木々のこずえの向こうから降り落ちて来ると思われるぐらいすばらしい二部合唱だった。

「ねえ、あの声はなんて言ってるのかわかる？」

「いや、まるで聞いた事ないね。」 雄輝が答えた。

「少なくとも学校でならった言葉——全地球語——にはないよ。」

「私だってそうよ。でも私、どこかでこの歌を聞いたことが

あるの。いつだったかしら.....？」

真里砂は懸命に思い出そうとしていた。

——<歌、歌.....大きな銀の月.....満月の歌声.....
.....すんだソプラノ、やさしい指、銀の服のあの人は——

「ママン！」

真里砂はがく然とした。

古い記憶が突如よみがえってきたのだ。

——そう、真里砂はここの人間だった。

ここで生まれ、ここで育ったのだ。

3才の誕生日まで—————。

「誕生日の日に何が起こったのかわからないかい？」

真里砂は悲しそうに首をふった。

なぜ捨てられたりしたのだろう—————？

「きっと、なにかわけがあったんだよ、真里砂（マーシャ）」

しかし、真里砂は雄輝の声を聞いてはいなかった。

その目は大きくひらかれ、驚きのあまり声を発する事ができなかった。

鋭と雄輝はとっさに剣をとって身がまえた。

こんなわけのわからない世界ではなにが起きるかわかった
ものじゃない。

—————しかしその必要はなかった。

ふりむいた二人が最初に見たものは、空き地の向こうがわ
にずらりと並んだ大木たちだったが、次の瞬間

それらは背の高い美しい人に変わった。

(未完)

(2 ・ 「森の中で」)

(2 ・ 「森の中で」)

2007年7月5日 [連載 \(2周目・大地世界物語\)](#)

p6.

2. 森の中で

しばらく霧の中にいるうちに、三人はだんだんと眠くなり、感覚がぼやけてきました。
——霧が濃くなるにつれて高まってくる、寄せる波音に似たかすかなざわめきが、遠くから呼びかける声のように聞こえるのは気のせいでしょうか。
不意に彼らはその声をはっきりと聞きとることができるようになりました。
あたかもトンネルをぬけた時のように、スポリと音が耳にはまりこんだのです。

マーライシャ——アアア……マーシャア——！

マーライシャ——アアア……マーリシャア——！

「だれ!?」 と真里砂は叫びました。

「わたしを呼ぶのはだれなの!!」

呼ぶ声は高く、低く、遠く、近く、繰り返し繰り返し聞こえてきます。

その声が真里砂の心の中に、わけのわからない不安となつかしさを巻きおこし、真里砂は耐えきれなくなりました。

「ここよ!!……わたしはここよ。あなたはだれ。どこにいるの？」

わたしはここよ！」

「待つんだ真里砂！」

ひきとめる雄輝の手を振りきって、真里砂はやみくもに霧の中へとかけだして行きました。

追いかけてやうとする後の二人も、三步と離れぬうちにお互いの姿が見えなくなり、不思議な呼び声だけがこだまする空白の中に閉じこめられます。

「ここよ、ここよ！」

すっと何かに強く引かれるような気がして、真里砂はそれきり意識を失ってしまいました。

次に気がついた時、真里砂は露の降りた枯れ草の上に横たわっていました。

着ている体操服も（それも半そでの）ぐっしょり濡れて、体はすっかり冷え消っています。

「よくもこんなになるまでのんびりと気を失っていられたものね真里砂。

……ここはどこかしら。」

実を言えば、彼女はしばらくの間なにがおこったか忘れていたのです。

それからあたりを見まわして、ようやく自分がとんでもない冒険にまきこまれたらしいと気づきました。

学園を包む朝日ヶ森ではついぞ見かけたことのない樅（もみ）の木があたりをとりかこんでいます。

「つまりここは学校のそばではないということね。きつともっと北の方なのだよ。」

それにしても鋭と雄輝はどこでしょう。

むやみに離れたりするのではなかったと、真里砂は悔やみました。

あの二人さえそばにいれば、少しもびくついたりせずにこの不思議な冒険を楽しめるのに……。

と、頭上で激しい羽音がして、驚いて上を見上げるいとまもなしに

背中にとび色の翼をつけた8~9歳の少年が目の前に降りたつと、この年頃の男の子にしてはなかなか優雅な動きかたで礼の姿勢をとりました。

「遅くなってすみません。マーライシャ様ですね。」

(☆シャーペン描きに色鉛筆塗りの背中に翼の生えた少年の絵あり☆)



P7.

本当なら真里砂は、翼をつけた男の子の出現に驚かなければなりませんでした。

もし彼女が普通の地球人なら、です。

ところが真里砂は少年の背中の翼より、彼のしゃべった言葉に気をとられて、自分が翼を見て驚ろかないことや、むしろあたりまえの事実として受け入れていることの奇妙さに気づきませんでした。

それほどにその言葉は風変わりでした。

こんな言葉は今まで聞いたこともないはずです。

それなのに……真里砂はこの少年の言ったことがよくわかったし、さらに驚いた事には、自分がすぐに返事をしたことです。

「ええ、そう。わたしはマーシャ、——マーライシャに決まっているわ」

これは、むしろ、少年の質問より自分の疑問に答えたのですが、しゃべってから真里砂は気がつきました。

わたし、前にもこの言葉を使ったことがあるわ——。

でも、いつでしょう？ 彼女の頭の中には、6歳以前の記憶がまったくありません。

有澄の養女になってから6年。

ようやく忘れかけた心の傷跡を再び見せつけられて、真里砂の顔はそれと知らぬ間に青ざめ、ひきつっていました。

「わたしは——マーライシャ。……マーシャ」

~~なに、マーライシャだったのかは忘れまして。~~

~~けれど、真里砂はこの瞬間にはっきりと悟ったのです。~~

~~今、彼女が立っているこの土地が、たとえどこであれ、どんな国であれ、（仮に地球の外であったとしても）、まぎれもない彼女の生まれた故郷だということを。~~

~~—ぐるぐるぐるぐる~~

~~—あたまの中で~~

~~—閉じこめられた~~

~~—むかしの記憶~~

~~—出口を求めて~~

~~—まわっているの~~

~~—ぐるぐるぐるぐる……~~

~~真里砂は立っていられなくて、そのままくずれるように枯れ草の上に倒れこみました。~~

~~翼のある少年はとても驚いて、すぐさまかけよって彼女を助け起こそうとしたのですが、真里砂は差し出された腕をじゃけんに振り払いました。~~

~~「いったいどうしたんです皇女（おうじょ）さま」~~

~~「皇女（おうじょ）ですって！—わたしが!？」~~

~~真里砂は思わず問い返してから、しまった！とあわてて口をふさぎました。~~

~~何がおこったのかわからない今、うかつな行動はとれません。~~

~~『おちつきなさい真里砂。ここがあなたの故郷だというのなら、なぜわたしが記憶を失い、—大で森の申をき迷っていたのか、きっとその謎の答えが見つかるはず。』~~

~~真里砂は直感で、目の前の少年が自分の味方だと信じました。~~

~~混乱した思考を、これだけ見事にす早く立て直すことができるあたり、実際に彼女は皇女と呼ばれるにふさわしいかもしれませぬ。~~

~~「あなたは誰？」~~

~~少年は心配そうな顔をして立っていましたが、真里砂がしゃんと背すじをたてて、ややぎごちな
いながらもはっきりと言ったので、人なつっこく笑いました。~~

~~「ああ、よかった。このまま気絶するんじゃないかって思ったんですよ。ぼくは“つむじ風”ルンド
家のパスター・クラダです。この森に住む鳥人（とりびと）族の族長~~

~~—~~

~~なに、マ—ライシャだったのかしら、それがどうしても思い出せません。~~

~~ぐるぐるぐるぐる、頭の底で、昔の記憶が暴れまわっています。~~

~~———外へ出ようとして。~~

~~奥の方で秘やかに、それでも確かに息づいているわたしの記憶。~~

~~なぜ上へあがってこないの？~~

~~彼女が記憶をさかのぼって行くと、いつも必ず一つの扉のところで~~

真里砂は何か不安になって、このまま自分の心を好きなようにほうっておけば、ひどく感情的になってしまうに違いないと思いました。

初対面の、それも自分より年下の男の子のいる前でそんな態度をとることは、好ましいとは思えないのだし、何がおこっているのかもわからない今、客観的で冷静な判断力を失うことは、もしやして危険なことであるかもしれません。

「あなたは誰なの？」

こういう時は無難な方向に話題を変えて、心を鎮めるための時間をかせぐのが一番です。

少年はひどく慌てて、顔を赤くしました。

「無礼なまねをしてすいません。もし人違いなら大変だってそればかり気にしてたんで……。ぼくはルンド家の第一子 Pasta = クラダ。(自己紹介用の“ちゃんとした名前”はまだ持ってないんです)。父はこの森の鳥人(とりびと)族の族長だったんだけど、“会議”のすぐ後で病気で死んじゃって……。だから今はぼくの母が族長です。それで……。」

真里砂はすっかり楽しくなってその話を聞いていました。

耳まで真っ赤にして話すのね。それになんてメチャクチャな自己紹介なんでしょう。

“会議”やら“自己紹介用のちゃんとした名前”やら、意味のわからない言葉もずいぶんありましたが……。

「……そんなわけで、帰って来たあなたを最初に出迎えるって名誉な役がぼくのものになったってわけです。」

「帰って来た。ですって!？」

真里砂は少なからずびっくりして聞き返しました。

「もちろんあなたは『やって来た』と、言おうとしたのでしょうか？」

Pastaはこの不意の質問にあきらかに気分を害されたようでした。

「——ああ、それはもちろん、あなたが本当に帰るべき所はもっとずっと南の皇城、ルア(うるわしの)・マルラインだけど。ぼくが言いたかったのはティカースからこのダレムアスの土の上に戻って来たってことです。」

「ティカース……丸い地の国。……ダレムアス……大地の国……。」

この二つは確かに聞いたことがあります。

丸い地の国(ティカース)が地球のことなら『ティカースからダレムアスへ……』、地球から大

地の国（ダレムアス）へ帰って来た!!

「じゃあ、じゃあここは地球ではないのね!? それで……帰って来た。ということは、わたしはこの国の——ダレムアスの人間なの？」

パスタはそれこそもう完全に怒ってしまい、ぼくをからかっているんですかとすごい剣幕です。

そんなつもりではないと、真里砂は大慌てで謝りました。

こうなったら正直に話すほかはありません。

「ねえ、驚かないで聞いてちょうだいね。実はわたし……」

『記憶喪失』にあたる言葉を思い出すことができなかつたので、彼女はしばらく言いよどんで考えていました。

~~「わたしには、ええと、昔の記憶が全然ないの。だから、ここがどこでいったいなにがおこったのか、さっぱりわからないのよ。……もし、あなたが知っているのなら、なにがどうなっているのか教えて欲しいの。」~~

~~「それは……本当ですか!?!」~~

~~パスタは驚くというよりむしろ怖えているようでした。~~

~~真里砂にはそれがなぜだかわかりませんでした。~~

~~「残念だけれど、本当のことなの。わたしは地球で、普通の地球人として六年間暮して……自分g
あ地球以外から来た人間~~

すると突然、森中に響きわたる角笛の音が聞こえてきました。

高く低く高く、危険を知らせるかのようにせわしく音色が変わってゆくのですが、それを聞きつけたとたんパスタの顔がさっとこわばりました。

「あの吹き方は“異変の笛”だ! 館で何が起こったんだろう!」

それから大急ぎで手に持っていた大きな袋包みを真里砂に渡して、

「ひめさま、ぼくはすぐに館に戻らなくちゃなりません。この中には着がえと（あなたは本当に変な恰好をしていますからね）当座の食糧、それに粗末なやつだけど剣が一振り入ってます。きちんとした旅仕度はここから西に一週間行った、森のはずれの村に用意されてるそうです。

そこの村の旅籠屋の“雪白”のルスカさんと“里ぶどうの瞳”って人ですよ。それじゃっ!」

よほど慌てていたのでしょう。それだけ言うとパスタはぱっと翼を

P10.

ひろげて飛び去ろうとしました。

「あっ、待って!!」

真里砂はこの見知らぬ森に一人でとり残される事に恐怖を感じました。

それに……その村へ行くにしても、文字通り“西も東もわからない”のです。

パスタは持ちあげた翼もそのままに、もどかしそうに振り返りました。

「……いいえ、何でもないわ。旅籠屋のルスカさんの所へ行けばいいのね？」

「はい。」——しかたがないわ。わたしだって家になにかあったら、他のものはほうって行きたいもの。

「ありがとう。気をつけてね」

「マーライシャ様もお元気で」

あっというまにパスタの姿は木々の向うに隠れてしまいました。

さあ、これでわたしは一人ぼっちになったというわけねと、真里砂が思ったちょうどその時、後ろから雄輝と鋭の叫び声が聞こえてきました。

「オウイ、ま・り・さ・あ!! ドコニイルンダア ！」

驚いたことに、真里砂には一瞬意味が解らなかったのです。

6年かけてすっかり自分の“言葉”になりきっていたはずの日本語が、です。

それから少し遅れて、“たった今パスタと話す時に使っていた言葉”に翻訳されて、意味が頭の中に入ってきました。

——わたしを探しているんだわ。でも、この調子では、わたし日本語を話せなくなっているのではないのかしら。

不思議なことが次々おこるので、少々のことでも一々慌てふためいているわけにはいきません。

それに、ここが真里砂の故郷なのかもしれないのですから。

真里砂は試しに一声、呼び返してみることにしました。

どうか日本語が出てきますように。

「ここよ！雄輝！鋭！こっちよ！」

森の中に響いた声は確かに日本語です。

ああよかったわ。雄輝や鋭と言葉が通じなくなったらこまるもの。

真里砂は、自分がまるで“不思議の国”に迷いこんだアリスみたいだわと思って心の中で笑いました。

そうでなければ“街燈跡野”のルーシィね。

パパとママを除けば世界中で一番好きな二人の友達がそばにいると感じることで、持ち前の空想好きで負けん気の強い性質が顔をだしたのです。

とり残された不安などというものは跡かたもなく消えました。

むしろ、そんな不安を感じた自分が腹だたく感じられるくらいで、

——臆病ね！あの二人が近くにいるくらい、もちろんわかっていたはずでしょう。——真里砂は自分自身をしっかりとばしました。

あの二人と一諸なら、どんなことがおこっても大丈夫だわ。

考えてみれば、今おこっている“これ”こそ、いつも憧がれていた“冒険”ではないこと？

(☆森の中で元気に立ち上がる、半袖の体操着にブルマ (w) 姿のマーシャの絵あり。シャーペン描き、色鉛筆塗り。)



2007年7月4日 連載 (2周目・大地世界物語)

2. 森の中で

~~目の前に不意に現れた山小屋を三人はあ然としてながめていました。~~

~~「これは……なんだ？」~~

~~不思議な霧はまだ消えてはいないので、あたりの様子はまったくわかりません。~~

~~ただその山小屋だけが目の前にぬっと建っていました。~~

~~「見たことのない建築様式だな。」~~

~~何年か前に焼けたらしくて、右手の方が黒くなった土台石だけになって草がはえていましたが、残った半分は (建築技師志望の雄輝の意見にしたがえば) 日本の合しょう造りとギリシアのヨリント様式のごたまぜに上から申世ヨーロッパ風をぬったくったような、風変わりな建物でした。~~

~~「ねえ雄輝、この建物……本物だよな。」~~

~~「本物でなけりゃなんだって言うんだ？ 本物に決まってるじゃないか。」~~

~~「これが本物なら、移動したのはぼくらかな。この家かな。」~~

~~「少なくともおれたちじゃ……。」~~

~~ない。と言おうとして、雄輝は不意に自分がどこに立っているか気づきました。~~

~~いえ、正確に言うならば、自分がどこにも立っていないことに気がついたのです。~~

~~一足の下にはもやっとした霧があるばかり、その上に30cmほど離れて自分の両足が浮いています。~~

~~よく見て見れば、普通の霧な。~~

(没原稿のバツテンマーク入り。)

リステラス星圏史略
古資料ファイル 4-X
『皇女戦記』
(最初期設定資料)

<http://p.booklog.jp/book/108651>

著者：霧樹里守 is 土岐真扉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/108651>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/108651>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ